
Story.01 黒のプレリュード

麻生柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Story・01 黒のプレリユード

【Nコード】

N6333M

【作者名】

麻生柚葉

【あらすじ】

一つ、また一つと貴方には大切なものが増えた。その事が悲しくて苦しくて辛くて、耐えられない心は毒を出す。たった一つ、貴方しか要らない。

大切なものを増やす貴方の心が理解が出来なかった。

ねえ、『ボクは貴方だけが大切なんだよ』

共に生きたいと逝きたいと願う事は、罪ですか。

それは全てのプレリユード

P r o l o g u e 0 0 ・ P r o l o g u e (前書き)

しろとくろ S t o r y ・ 0 0 O v e r t u r e の続きの
お話になります。

P r o l o g u e 0 0 ・ P r o l o g u e

この物語を

私の願いが沢山詰まったこの物語を

親愛なる君に送ろう

どうか、どうか

最後まで読んで欲しい

どうか、どうか

最後まで見捨てないで欲しい

どれも愛しくて、どれも大切に

どれも自分の手のひらから零したくなくて
捨てられなくて、切り捨てられなくて

我侬ばかりの私は、大切な愛する人の幸せを願うよ

だけど、もし自分自身の願いを言って良いのなら

沢山の建前と、沢山の虚無に彩られた心の奥底で

たつた一つだけ、私の願いが叶うならば

ただ、私はもう一度君に

会いたい

P r o l o g u e

0 0 ・ P r o l o g u e

(後書き)

最初のP r e l u d e

白黒共通

Chapter 1 Prelude 01・君に、ただ…

この世界で一番背の高い塔の上からまだあけなさの残る少年は窓辺に頬杖をついて愚かな世界を見下ろしていた。

全てを一望出来るそこからの景色は申し分無い程の美しさだろう。しかし、少年の金に染まる瞳にはこの世界に美しさなど感じる事が出来なかった。

カラフルであろう色は抜け落ちて、モノクロにくすんで見えた。

（馬鹿みたい。こんな事を続けていたって、何かが変わるわけじゃないじゃん。）

傍らに置いていた片目のウサギの人形を突くと、呆気なく倒れ机から落ちる。

床には同じように落とされた人形達が散らばっていた。

塔の天辺に用意された部屋は華美で豪華で品良く、家具のどれもが質が良い。

一見庶民には手の届きそうの無い豪華な私室。少年・葎那は天に一番近い場所に軟禁されていた。

悪魔にとつてそこは一番屈辱的な場所。しかし、その事について葎那は特に何にも思っていないかった。

むしろ必要以上に誰も寄って来なくて清々していた。

この軟禁生活は生きていく上では何の不便も無かった。

行動は制限されているものの、言えば欲しい物は粗方手に入れることが出来た。

紅茶が欲しいと言えば最高級の紅茶が用意され、服が欲しいと言え

ば品の良い老舗のオーダーメイドの服が手に入った。

けど、

（・・・欲しい物はそんな“物”じゃない）

例え、疎まれ命を狙われる身であってもこの世界での序列は四位なのだ。

権限を奪われる代わりに、無駄に財が有り余るほど所持していた。それでも悪魔はズル汚い。

金眼を禁忌だと嫌っておきながら、周りには律那の位の高さにへこへこ諂い甘い蜜を吸おうとする奴等ばかりだった。

そして邪険に思い、殺してやろうと企んでいる奴等ばかりだ。

（くだらない。この世界、全てが。

無意味さを知ろうともしない、愚鈍なもの全てが。）

暇で暇で仕方が無い。

頭の脳にサフィアがある為に、記憶力や読解力は人の何倍も優れている。

既にこの世界の本の知識は粗方全て吸収してしまった。

（この世界の全てを知って、その愚かさに嘲笑しか浮かばなかった）寂しく無いようにと置いてある人形があったって一人で遊ぶのはつまらない。

（だけど、幼い心遣いをする兄が可愛かった。）

心地良い天気だからと言って昼寝する気分にもなれない。

（流石に一日にそんなに長く寝てらんないよ）

葎那にとってこの退屈な場所から抜け出す事など造作もない。

しかし、抜け出す事をしないのは大好きな双子の片割れの存在があったからだ。

大好きな片割れに迷惑をかけるのだけでも避けたかった。唯一愛してくれた片割れ。色の無い世界でたった一つだけ色のある存在。

この世界で葎那が唯一愛する事の出来た存在。

頼もしくも、脆い兄・刹那

（ねえ、せつちゃん。葎はこの世界が大嫌いで憎くてたまらない。

だから簡単に縛られて奴等の思い通りに生きる事なんて絶対しない。

屈しないし、負けない。邪魔をするものは消すし、幸せは自分で掴み取るよ。）

「・・・だけどね、せつちゃんを犠牲にしてまで生きていたくはないんだよ。」

今頃、彼は何をしているだろうか。

きっと葎那の為に色々動いている事だろう。

いつだって刹那は正面を向いて正しいと思うことに向かって歩みを止めることは無い。

自信満々に俺に任せろといった彼に葎那はいつだって何も言えなかった。

刹那なら、どうにかしてくるような気さえした。

縋ってしまいたくなった。唯一の人に甘えたかったのかもしれない。自分と同じ大きさのはずなのに、より大きく見える背中はどうしようもなく憧れた。

だから自分の体の幼さが憎かった。

同じ年頃の子供より群を抜いて力が強い自信があった。絶対に負けない自信があった。

頭脳戦だって知識量だって大人に負けない自信があった。

だけど、力ある成人した大人の体力に、戦闘力に勝てる自信は無かった。

（・・・もっと大人だったなら！）

律那とは違い、自由に動ける刹那に迷惑をかけることもなかっただろう。

打開策を共に手を取って出来る事も沢山あるのだろう。

刹那一人に無理をさせる事も無いのに・・・

（せっちゃん、お願いだから無茶だけはしないで・・・）

いくら大人びていようと、律那はまだ子供だった。

そしていくら序列第三位・時期魔王候補の刹那もまた子供だった。

Chapter 1 Prelude 01 君に、ただ…（後書き）

大好きな憧れの君に、ただ・・・
せめてこの思いだけでも届けば良いのに

大人の、しかもお偉い様というものは総じて頭の固い連中ばかりだ。いかにも自分達の意見が正しいと押し通して、曲げない。

自分の利益と保身の為に、本当の真実を偽ってどんなにあくどい事だつてやってのける。

魔界の中心部に位置する黒と赤を基調にした財を存分に掛けて作られている王家の巨大な城

その大きさにも関わらず、王家と古くから伝わる数少ない名家の血筋しか訪れる事ができない為、普段から閑散としている

そんな城の中でも賑わっている場所があった。

政治や施策、利害調整から根拠の無い噂話まで話し合う部屋、会議室である。

そんな話し合いと言う名のくだらない井戸端会議の最中に飛び込んできては不機嫌顔を隠す事無く晒す少年に、大人たちは苦渋の表情を見せた。

揃っていた大人たちは新参者から古株まで多数に渡るが長寿の種族であるため殆どの者の容姿は若い。

チラチラと視線を交し合うその姿は面倒事の押し付け合いをしている事が傍から見てすぐ分る。

会議中の三度に二度の確立で飛び込んでくる少年が何を望んでいるかなんて、この場に居る大人たちの中で知らない者は居ない。

やって来た少年が何を言いたいのかはよく分っている。

そして、返す言葉はいつも決まっている。

運悪く少年の一番近くにいた悪魔は渋々重い口を開く。

「しかしです、刹那様。いくら王族といえど禁忌は禁忌です。むしろ王族から出てしまったから、これほどまでに重要な問題なのです。」

「そんなの知らない！刹那は刹那だろ！！
大事な片割れがあんな扱いされるのを俺は黙ってみてられない！」

いつまで経っても平行線の会話に少年・刹那は苛立ちを募らせる。大人からしてみれば駄々を捏ねる手の焼ける我侭少年なのだが刹那にとっては真剣な大問題である。

（理解できない！あんなに綺麗な目の何処が禁忌だって言うんだ。何色の瞳をしようが、変わらないのに。何で決め付ける！）

刹那は刹那が大好きだ。そして金色の瞳が大好きだ。いくら気丈に振舞っていてもその輝きが日に日に失われていっている事を知っている。

刹那以外の全てのものに絶望し、憎しみを持ち始めている事も知っている。

（このままじゃ、あいつの笑顔が消えちまう・・・！）
それだけはなんとしてでも避けたかった。

時間が・・・時間が無かった。時は一刻を争った刹那は苦虫を噛み潰したような顔になる。感情任せに手当たり次第にここにある物を大人たちに投げてしまいたかった。

自分のこの性格が悪魔らしくないのは昔から分っていた。自分主義で利益になる他人以外を必要以上に気にかける悪魔は居ない。

そういった悪魔たちの中で育ってきても、刹那の性格は変わらなかった。

悪魔らしく演技している事が殆どだが、自分が異端というのは認めている。

そういった意味では刹那の方が余程悪魔らしかった。

それなのに、魔界の大人たちは刹那では無く刹那を選んだ。

魔王になると言う事は、幼い頃から素晴らしい事だと誇らしい事だと教え込まれてきたけれど

そんなものが自分に合うとは到底思えなかった。

「駄目に決まっているでしょう。そんな事。

貴方様は次期魔王になるお方なのです。一緒に住むだなんて・・・
会いに行くのを控えてもらいたいくらいなのですから。」

いい加減諦めなさいとでも言うように大きなため息を呆れと共に吐き出すと、この話は終わりだとも言うように大人たちは話を元に戻してしまった。

唇を噛み締めて俯く

強く握りすぎた手のひらが痛い。

（くそつたれ！）

刹那はこちらにもう視線を向けない大人たちを睨め付け
飛び込んできた時以上に大きな音を立てながら扉を勢いよく開けると、刹那はそのまま走り去った。

何度同じやり取りを繰り返し、同じ言葉を言われても刹那は決して諦める事は無かった。

もがいてもがいて、動いていなければやっていられなくて。
諦める事など到底出来る訳が無かった。

こいつは将来利用できるし役に立つから、殺すなと

遠い幼き日に殺されそうになる律那の前に立ち宣言した事があった。
あの日の事は決して忘れない。

目の前で大切なものを奪われそうになった事、ギラギラと血走った
目をして物騒な武器を手に使っていた大人たちの姿を。

怯えの感情を映した律那の瞳を見てもう二度とこんな目にあわせな
いと、絶対に守ると自身に固く誓った

序列第三位である刹那の命令は効力があつた。

子供とはいえ、腐っても王族。

血の繋がりと刹那の剣幕のお蔭でこれまで表立って律那を傷つけ殺
そうとする輩はいない。

でも裏で色々画策し、間接的に殺そうと行動しているのも知ってい
た。

子供過ぎて、小さな手では大切なもの一つ守れない。力が足りなか
った。

（・・・っ、くそっ！ 俺は律那を失いたくないのに）

刹那にとって行き難いこの世界は、刹那の事を嫌い嘲笑っているよ
うに感じた。

次期魔王候補とその駒

いつだってこの世界は双子である刹那と葎那を差別した。

この世界に色は無い。刹那はこの世界に色を見つけられなかった。

Chapter 1 Prelude

02・零れ落ちゆく（後書き）

零れ落ちゆく色のカケラ

一つとして落とすたくは無いのに、何故

城下から少しばかり外れた所にある塔の中央近くにある一室
息を殺して忍び込んだ刹那が居た。

（・・・これも。あつ、これもだ。）

こそこそと隠れながら献上品をあさるその姿はさながら怪しい盗人である。

当の本人である刹那にはこれっぽっちもそんなつもりは無く、むしろ良い事をしているとばかりに得意げだ。

しかし、壊したり捨てたりしている為盗人とあまり変わりはないのだが。

何を隠そう、律那に送られるであろう品の検品作業真っ最中である。

軽い呪いのかかった呪具は力を持って壊してしまえばいい。

複雑な呪いのかかった呪具は、その呪いの力を利用して返してやればいい。

昔はすぐ呪いにかかり、体中切り傷擦り傷、熱や体調不良で倒れる事もあったけれど最近ではそう簡単に引つかかる事はしない。

（人と悪魔は成長する生き物である。・・・なあって）

成長して欲しい呪いの送り主達は相変わらずの行動を続けているのだけれど。

手を休める事無く、呪具の選別を続ける。

（これは、大丈夫。・・・こっちは駄目。）

呪いです！と言わんばかりの宝石もあれば、日常品に化けた呪具もあった。

上に立つ身である刹那は立場柄、呪いの臭いには敏感だ。

そつという教育もされてきたし、安全に生きていく為にも必要な事だ

った。

ポイと背後にネクタイピンを放り投げた。

（こんな物あいつに送ってどうする。絶対使わないし。）

「てっー!!」

放り投げてすぐ、ご丁寧にも背後から襲ってきた衝撃に、思わず叫び声が出る。

バツと振り返るとそこには絶賛呪い発動中のネクタイピンがあった。

「・・・マジでか。」

（全っ然気付かなかった。）

軽い呪具だった為に軽傷で済んだが、この呪いがもう少し重かったならと刹那は冷や汗をかく。

最近こういった類の呪いが増えてきている。気を抜くと、すぐこれだ。

悪魔たちは改心する所か嫌な方向に成長しすぎだった。

鎌鼬を繰り出しながら地面に転がっていたネクタイピンに慎重に近づくと思い切り踏みつけて壊した。

（上手く臭いを消しやがって反則だぞ！）

「あーあーあー。やっちゃった。・・・だあー!」

髪の毛を思い切り掻き毟るとドスンとその場に座り込んだ。もうため息しか出てこない。

洋服には汚れ一つ無く、肌に直接傷をつける辺り実に悪魔的である。痛みで怪我がヒリヒリするが、背中では治療するに治療できない。随分ぱっくりいったものだ。いくら体が丈夫だとは言え、痛いものは痛い。

（こういう時、使い魔が居れば楽なのに）

使い魔の儀式は決して簡単なものではない。召喚にも契約にも危険を伴うものだ。

この魔界広しと言えど、成功している者など一握りしか居ない。何より使い魔は人を選ぶ。

この危険な賭けをしようとする者は少ない。

だけど、自分に絶対的な忠義を誓う有能なる僕が居れば今の生活から格段に向上すると思った。

こう言う時、姉が羨ましくなる。彼女は稀なる成功者の一人だった。一癖も二癖もある二人が、何だかんだで良い主従関係を築いていている事に憧れた。

いつも刹那の絶対敵わない上位に居る彼女は刹那が欲しいもの全て持っている気がした。

使い魔がいる事も、自分より年上な事も、魔王になる事は無いという事実も・・・

（うじうじ考えても仕方ない。）

検品はもうすでに済んだ。ならば、もうこの場所には用は無い。

刹那は傍らに放っておいた新作の人形を取ると、もう一度先に起こることを思っただきなため息をついた。

目指すは、塔の天辺。

送り主達は知らない。

呪いの全てを刹那が処理し、被害に遭うのは刹那だという事を。傷ついているのは、嫌う葎那ではなく大切な刹那だという事に。

（葎は俺が絶対守るんだ・・・！）

時が全てを解決してくれるとは思わない。

着実に一歩一歩進む時間は決して待ってくれない。

悔しかった。何より捕らわれる自分が。焦りが募り、時間より一歩先を行って見たかった。

Chapter 1 Prelude 03 赤色の想いと（後書き）

赤色の想いと、止まらない時間

置いていかれたくないと、心の底から想った

俗世から切り離された塔に似つかわしく無い、ドタドタと荒々しい足音が聞こえる。

こんな風にやってくる人は一人しか居ない。

自然と律那は口元が緩むのが分った。

早く早く早く・・・

急ぐ気持ちに蓋をして、ゆっくり瞳を閉じ、大きく深呼吸を一回。今まで考えていた黒い感情を吐き出す。

この醜い気持ちを彼だけには知られたくは無かった。

音が段々と大きく近づいてくる

騒々しい音。だけど微笑ましくて律那はこの瞬間が好きだった。

(カウント・・・三、二、一)

「・・・律！」

バンっ、と息を切らしながらも嬉しそうな笑顔で勢いよく扉を開け放つ刹那が居た。

(そうやっていつも君は律を掬い上げるね)

「いらっしやい。せつちゃん」

律那は出来る精一杯の笑顔で答えた。

他愛無い刹那の話を聞きながら律那は紅茶を入れる。

紅茶が大好きな刹那のために調べ、取り寄せ、練習を繰り返した。誰にも負けない美味しい紅茶を入れる自信があるのはここだけの話だ。

（今日はどんな顔を見せてくれるのかな）

一緒に居られない時間を埋めるように、外の世界を教えようとするように

森の中で綺麗な花を見つけた事、大人に悪戯して一泡吹かせてやった事、今日のご飯に嫌いな物が立て続けに出て来た事・・・

刹那は沢山の事を饒舌に話した。

話の内容よりも身振り手振りを加えて時に大げさに楽しそうに話す刹那が愛おしかった。

話が一段楽したところで、刹那は新しく持ってきた人形を仲間に加えようと辺りを見渡した。

童話をモチーフに作られた人形は刹那のお気に入りである。現に彼の大好きな紅茶の名前をそれぞれに付けていた。

まだ全ての人形が出来ている訳ではなく、刹那が来るたびに増えている気がする。

綺麗に机の上に並べられているはずの人形の姿はなく、窓際に無造作に転がり落ちていた。

「この人形達はストレス発散の道具としておいてるんじゃないんだぞ。」

言うが早いか行動が先かその声に律那が振り向いたときには刹那は律儀にも床に散らばった人形達を拾っていた。

本気で怒っている訳ではなく本当に困った奴だなという風だ。

いつもこの人形達を乱雑に扱うとプリプリと文句を言うのはお気に入りの人形だからだろうか

多様な姿の人形達は持ち主に似たのか、少しまぬけな表情をしたどこか愛嬌のある顔をしていた。

特に猫の人形のいつそ清々しく笑っている歪んだ口元など刹那にそっくりだ。

こんな風に刹那に世話を焼かれるのは嫌いじゃない。

律那が敢えてそういう行動をしているのを刹那は分っているのだろうか

律那がもう一度チラリと見れば回数を別けて拾えば良いのに、何度か落としながら全ての人形を腕に抱えていた。

性格が出るのだろう。本当に不器用だ。

ふと、テーブルの上に綺麗に並べるその後姿に律那はちょっとした違和感を感じた。

常人には気付かないかもしれない僅かな違和感

そう、手元より少し遠くの場所に人形を置こうと前かがみになった時のほんの少しの体の強張り

(・・・また、か)

いつだって刹那を見てきた。片割れたからか、秀でた頭脳も手伝ってか、刹那の事は大抵分る。

いくら上手く心配をかけないよう誤魔化そうとした所で、律那が見破れないはずも無い

律那が刹那を騙せても、刹那は律那を騙せない

紅茶を入れていた手を止め乱暴に後ろから動けないよう肩を掴むとシャツを思い切り捲る

「ちよつ、おい！」

刹那の慌てた様な制止の声など聞かない。

「ねえ、せつちゃん。この切り傷、またなの。」

これは疑問系ではない。断定だ。

刹那の背中にはたいして治療もして無いであろう真一文字に裂かれた痛々しい傷跡

傷口の触れるか触れないかの所で撫でながら意地悪く耳元で囁くように言う

後ろからの為、刹那から刹那の顔はよく見えないが痛みと後ろめたさで歪んでいる事だろう。

逆に、意地悪そうな声とは裏腹酷く泣きそうな顔をしている刹那を刹那は知らない。

「今回は、何？」

「・・・う、いや、転んだだけ・・・っ！」

バレバレなのにも関わらず、嘘をつく刹那の肩を思い切り強く掴んだ後手を離れた。

失礼なくらいに勢いよく刹那は刹那から遠ざかって距離をとると、刹那に目を合わせないよう視線を逸らした。

しどろもどろに口から出る言葉は小さすぎてよく聞こえない。

そんな青ざめた顔で否定されても説得力は無い。それに

「馬鹿なの？せつちゃん。どう頑張ったら転んでこんな怪我ができるの。」

刹那は最近使うことの多くなった救急箱を取り出すと、輝かんばかりの笑顔を刹那に向ける。

（・・・今回も思いつきり痛くしてやろう）

刹那が使う分救急箱の中身は大繁盛で、お蔭様で治療のスキルも格段に向上した。

今ではわざと染みる治療をするのもお手の物だ。

（これに懲りて、危ない真似なんてしなければ良いのに）

「・・・呪い・・・返しに・・・失敗・・・・・・しまった。しまった。」

ため息と共に渋々と刹那の口から零れ落ちた言葉は、毎度刹那の予想を裏切る事がない。

律那に送られるあの大量の、悪意の籠った呪いの数々。

刹那はそれを事前に盗み出しては、一人で処理をしているのだ。

完璧にこなせば問題は無いのだけれど処理し切れなかった呪いに自ら被ったり、呪い返しに失敗したり・・・

いつも何処かしらで失敗して怪我を作ってくる。

もうどれくらいの傷を見たのか分らない。

もうどれくらいの傷を隠されたのかも分らない。

刹那は不器用だから、自分で治療出来る範囲は限られている。

しかし、傷を負ったびに自力で治せるように成長しているのも確かだ。

治ってしまった傷を見つける事は律那には出来ない。

いくら体が丈夫だとはいえ、無理はしないで欲しい。

しかもそれが自分の所為となれば、律那には耐えられなかった。

「・・・そんなの律が自分で処理するのに」

小さく零れたその言葉は刹那までは届かなかった。

言ったところで刹那は聞かない。

どんなに酷い言い方をしたって頑固で絶対に曲げやしない。

葎那は呪いを送られてきたつて全て処理しきる自信があつた。ちやつかり威力を倍増させて返す自信だつてあつた。

(なのになのに、なのになのに……)

事前に全部持っていてしまう。律那を心配して一人で解決しようとする。

気付かない。彼はいつだって気付きやしない

自由の無い生活より、自身が殺されそうになる事より、それが葎那にとって一番の苦痛だという事に

(・・・いい加減早く気付いてよ刹那)

Chapter 1 Prelude 04・金色の願いと（後書き）

金色の願いと、捕らわれの言葉

言えない、言えない、いつだって言葉に出来ない

巨大な城の長い廊下を足音を立てずに静かに歩く青年がいた
視界に入れているだけならば空気に溶けてしまいそうくらい存在
感が乏しいのにも関わらず、彼だと認識した瞬間パツと現れるその
華のような存在感

辺りを見渡しながら歩いているのはきつと自分を探しているのだろ
うと直感する。

捕まったら厄介だ。こちらが先に気付いていて、そして相手に気付
かれていない分幸運だろう。

少し離れた廊下の角に隠れながら観察していた刹那は思う。

（捕まったら、ヤバイ。）

嫌な汗をかくのを感じながら、刹那は息を殺して後ずさる。

青年の歩く先とは反対方向に踵を返したその瞬間。

「・・・つぐえ！」

急に首根っこを掴まれ浮遊感と共に宙に浮く体。

刹那は首の圧迫感に顔を歪めながらも見上げた先には、素晴らしい
くらいに素敵な笑顔をした姉の使い魔の姿があった。

あんなに離れていたのに、どんな離れ業だ。そしていつの間に気が
付いた

そんな事が刹那の頭を過ぎったが、しかし一瞬で捕まった事よりも
その笑顔に恐怖した。

「じいやー！」

「じいやじゃ無いです。執事です刹那君。」

そんな事より、マスターが呼びですのでご同行お願いします。」

嫌な顔を一つせずスッパリ訂正する執事と名乗る青年。執事と言うのは役職名ではなく彼の名だ。

長く生きてはいるのだろうが、まだまだ若い。外見年齢は三十路と言った所だろうか。決して爺と呼ばれる姿はしていない。

“じいや”はただの愛称だ。本人は嫌がっているが、定着してしまった為に変える気は無い。

「い・や・だ！」

（姉様が用？・・・駄目だ嫌な予感しかしない）

刹那はジタバタと暴れてみるが、大人と子供の体格差、捕まれた腕は離れる事無くビクともしなかった。

悪足掻きは持ち上げられた猫状態を抜け出せる訳もなく、首が苦しくなるだけだった。

「いやはや、全く。困った人ですね。暴れて、僕の手を煩わせないで欲しいです。」

言っている台詞と声色は困っているのだが、顔は全く困ってなど居ない。

むしろキラキラした笑顔は心なしか嬉しそうだ。

「ちよつ、待て！」

執事は見事な早業で手際よく何処からか取り出したロープで刹那を縛り上げると有無を言わさず俵担ぎをして颯爽とその場から連れ去るのであった。

「このサド野郎ー！！」

「良い叫び声です。」

刹那の叫び声だけが静かだった廊下に響き渡った。

先ほどと同じように、静かに足音を立てずに執事は早足に進んでいく。

それは刹那を抱えていたとしても変わらない。ピンと背筋を伸ばして歩いていった。

諦めたのか、刹那は大人しく流れに任せてに脱力している。

そして執事は華美な装飾がされた扉を迷う事無く、刹那を抱えあげている手とは逆の空いている手で思い切りよく開けた。

「連れて来ましたよマスター！」

ノックも無しに行き成り入ってきた執事と刹那を怒るでもなく招き入れると

ぐるぐる巻きに縛られて俵担ぎにされている刹那の姿を見た女性は優雅に猫のように微笑んだ。

城の中でも珍しい寒色で纏められた部屋は上の階と吹き抜けになっている開放感がある。

大きな窓に背を向ける形で位置する豪華な椅子に執事のマスターである彼女、杏那は腰掛けていた。

「む？ご苦労だったね。じいや」

「じいやじゃ無いです。執事です。」

執事という名も不服ですがじいやよりは良いです。好い加減執事にしなさい。マスター。」

杏那はいつもながら律儀に訂正するの執事の言葉を右から左。綺麗にスルーだ。

執事は近くにあったソファーに刹那を放り投げると自身も傍らに腰掛けた。

勿論縄を解くことなどはしない。

「姉様！こんな無理矢理連れて来て俺に何の用なんだ？」

不満を隠そうとせずに顔に出しながら、芋虫状態の刹那は問う。

「別にアタシは無理矢理なんて頼んで無いけどねえ。まあそれは良いとして、刹。

お前また怪我したって言うじゃない。それ、どうにかならないのかい？」

「・・・姉様は分かってるだろ。」

この話題は嫌だというように、顔を逸らしそっぽを向く刹那

「まあ、可愛い我が弟の事はこの魔界の中じゃ一番分かってるつもりだけどね。

律が大切だから心配するのは分かるが、アタシにとってはお前も大切に心配なんだよ。」

椅子から立ち上がりソファーに近づくと杏那は刹那の頭を優しく撫でてやった。

気恥ずかしさからか、刹那は顔をあげようとはしない。

「それも・・・分かってる。」

（分かっているけど・・・中々難しい）

この魔界の中で刹那の気持ちを分かってくれるのは杏那だけだろう。勿論一番仲が良いのは律那であるが、律那の為に彼に隠している部分を知るのは杏那だけだった。

律那が大切だと言い切っても、母とは違い変わらぬ笑顔で微笑んでくれた彼女が姉であった事を本当に嬉しく思う。

刹那の行いを心配はするものの咎める事はせず、尚且つ助力してくれるのがありがたかった。

彼女が律那の為に偉い様達に口添えしてくれているのを知っている。

そんな優しい姉が刹那は好きだった。

「お前が傷ついたら傷ついただけ、律もアタシも心配するし悲しくなるんだ。」

特に律は、自分の所為だと苦しんでしまつよ。」

「うん。」

「アタシはお前みたいに行動出来ない。見守る事しかできないし、口添えするしかできない。」

「ただね、お前に無理はして欲しくないんだ。」

「大丈夫。無理じゃない。俺一人でも守ってみせるから。」

「お前の意思は強いから、止める事はしないけど・・・
ちゃんと慎重に考えて行動する事！無茶は絶対しない事！自分の事をあまり犠牲にしないこと！

この事をしっかり心に刻んでおいて。分かったかい？」

「っ、分かった。」

「刹はちゃんと実力もあるんだから、見極めて行動すれば大丈夫さ。
どうしても駄目なら、アタシやじいやに頼ってくれば良いから。」

「じいやじゃ無いですけど、僕も微力ながら力をお貸しします。」

いつの間にか執事も加わって頭をボサボサにするほど撫でられる。
その手は温かくてどこかくすぐったかった。

「・・・サンキュ。」

杏那は絡みついた縄を解いて立たせると、その小さな体を抱きしめた。

この温もりを、心の温かさを律那にも知って欲しいと刹那は思った。

Chapter 1 Prelude 05・水色の悔いと（後書き）

水色の悔いと、優しいまなざしの先に

せめて、可愛い弟の前でだけは良い姉である事を努めよう。

「・・・麗しき、姉弟愛というやつですか。」

先ほどまで居た来訪者が帰り、主従だけになった静かな部屋で含みのある笑顔で執事は言う。

少しばかり雑談や相談をした後、刹那は元気よく帰って行った。

「ふん。分かっている癖に」

杏那は黒い艶のある長い髪を翻らせて玉座に戻ると、頬杖を付きながら楽しそうな執事を見る。

全てを知りながらマスターである自分に意地悪い事を平気で言う。

性格の悪い奴だ。使い魔としての立場を理解しているのか疑わしい。

「刹那君を心配し、律那君を案じ・・・

弟思いの良い姉じゃないですか。ねえ。それが本心ならば、ですけど。」

「勿論、本心に決まっているだろう？アタシはいつだって刹を心配し、律を案じている。」

これは嘘偽り無い本心だよ。」

「ああ、失礼。本心ならば・・・ではなく、裏に含みがなければです。」

(・・・お前の方が裏に沢山含ませているだろうに)

多くを語らず、本心も嘘も変わらぬ顔で吐き出す執事は色々な意味で得体が知れない

普通の捻りよりも性質の悪いくらいに複雑に捻くれている執事はい

つも何がしたいのか分かり辛い所がある。

難儀な使い魔を召喚したものだと言ふ過去を悔やむが、もう執事とも長い付き合いだ。

全ては分からずとも、慣れの所為か大体は把握できるから良しとしている。

その性格にうんざりする時もあるがへこへこに従う出なく、自分に對し強気な態度を取れる執事を杏那は気に入っている。

そして、捻くれ者同士案外良いコンビなのではないかと思っている事もまた事実だ。

「純情なる少年を騙して、貴女は酷い人ですね。だけど、そんな貴女が僕は嫌いじゃない。」

杏那が葎那を庇うのには訳がある。

葎那が邪魔ならば、殺してしまえば良い。自分でやらずとも他の悪魔をけしかけてやれば良い。

そんな事は至って簡単だ。

しかし、葎那が死んだ場合問題なのは刹那の行動だった。

片割れの大切に思っている葎那が死んだ時、悪魔の癖して優しい心を持つ刹那は魔界を悪魔を憎み出て行ってしまうであろう。

もしくは、葎那を庇い刹那が死ぬという事も絶対に避けたい。

それは非常に杏那に対しては面倒な事だった。

別に、弟が死のうが出奔しようが自分は悲しまないと思う。

むしろ、何も思わない事が普通だ。非道と言われようともこれが悪魔の性である。

なのに何故、気にかけて心配するのか。それは、杏那は絶対に魔王にはなりたくないからである。

王族と言う名に縛られている今、これ以上何かに縛られたくなかつ

た。

魔界では王族が魔王になる世襲制だ。それにプラスして妙なしきたりがある。

男女交互に魔王に就任しなければならない事だ。

平等を謳っているのかもしれないが、迷惑な話だ。

しかし、現在の魔王が母であり女性なのは杏那にとっては幸運な事だった。

母の次に魔王になるのは第二王子である刹那だ。

例え、杏那が先に生まれたとしても第一皇女である以上次期魔王候補は刹那なのだ。

しかしもし、その刹那に何か不慮の出来事が起こってしまったら、次の魔王候補は禁忌である第三王子の律那か、女である第一皇女の杏那か・・・

魔界のお偉い様は杏那を選ぶだろう。そんなことなど想像にたやすい。

しきたりを一度曲げても禁忌になるよりかはまし、とそう考えるに決まっている。

そんな事態にならない為にも、刹那には魔王を継いでもらわなくてはならない。

その為の手っ取り早い方法が律那を庇ってできる限り守ってやり、刹那への危険を極力減らしつつ刹那に身を大切にしろと忠告する事なのだ。

表立って行動出来ないのは、下手に動いて魔界に睨まれては生き難いから。ただ、それだけ。

魔界から逃げ切る事も造作も無いことだが、王族としての暮らしに慣れてしまった今、態々新しい生活を始めるのはとても面倒くさい。

「律の事はどうでも良いけど、刹に死なれたら困るのはアタシだ。」

それに、お前も忙しくなる。面倒事は嫌いだろう?」

「それはごめん被りますね。」

マスターが魔王になったら是非僕との契約を破棄しましょう。」
クスクスと本気が冗談か分からないすれすれの言葉を楽しそうにサ
ラリと笑顔で零す。

「だ・か・ら! そうならない為に、くれぐれもちゃんと見ていて
おくれよ。じいや。」

「じいやじゃ無いですけど、見ていてあげますよ。適度に。」

おちよくっている様に感じられるが、その言葉に嘘は無いだろう。
一応命令でもあるのだから

勿論関われる範囲内で。言葉通り適度に、だろうが。

「それにしても律那君は刹那君の役に立つ駒として生かされている。
しかし、実際はマスターの役に立つ駒として生かされているんで
すから。」

その事実が気が付かない魔界の悪魔達は本当に馬鹿ですよね。」
「役に立つてもらっさ、アタシが魔王にならない為に律には生きて
もらっ。」

(そう思わなければ、アタシはアイツ等を愛せない)

例え、歪んでいようとこれも一種の愛情になるのだろうか。

悪魔を、他の者を愛せる事ができる刹那は異例な事でやはり異端な
のだ。

律那だって片割れだからという特殊な例で刹那を大切に思う愛はあ
るものの、他のものに対する愛は・・・

杏那への愛など無いのだろう。杏那から律那への愛が無いように。

(頭の良い律の事だ。全て分かっているに決まっている。)

それでも、何も言わないのは理由はあれど、刹那を傷つけないよう
行動している所為か。

他の悪魔達よりは幾分も随分ましに思ってくれているのであろう。
久しく会う事の無いもう一人の弟に思いを馳せた。

「もし、アタシが魔王になるなんてそんな最悪な事態に陥ったのなら全力で逃げるから。」

その時は、お前も道連れだよ。執事。」

「お心のままに、マイマスター。」

ですが、迷惑料として僕の名を変えてくださいね。」

「考えておくよ・・・名を。」

確証は無いし、そうならないように行動するはずなのに、最悪であるはずの先になるとそんな気がした。

だけど、二人でならば面倒くさいが面白い逃走劇になるのだろう。
同じ事を思ったのか、お互い顔を見合わせ面白そうに声をあげて笑った。

Chapter 1 Prelude 06・嘘の様に瞬く（後書き）

愛しいという感情は嘘の様に瞬く

だけど、お前と居る時はやはり居心地が良いと感じるんだよ

大人たちに不満をぶつけ、仕方ないから勉強も少しする。
あまり城に居たくないからコッソリ別宅を作って充実させたり、姉
と執事に話を聞いてもらったり、葎那の所に遊びに行く。

何ヶ月も何年も同じことの繰り返し。

だけど、この日常が刹那にとっては本当に大切な愛おしいものだっ
た。

「なあ、葎那。」

「・・・なあに？せつちゃん」

紅茶を飲む手を止めて葎那は小さく微笑む。

「俺・・・」

「うん。」

葎那は聞き上手だ。それは刹那に対してに限った事かもしれないが、
言葉に詰まっても急かす事無く待っていてくれる。

どんなにくだらないう内容の話でも、呆れたり茶化した言葉は言っけ
れどきちんと最後まで聞いてくれる。

自分よりも数倍頭が良くて、勉強で分からない事があっても全部分
かりやすく教えてくれる。

馬鹿にしたような台詞は言うけれど、卑下ではなく軽いからかい半
分で言ってるのが分かる。

「俺って幸せ者だな。」

「はあ！？」

・・・何、せつちゃん急にどうしたの？熱でもあるの？」

何言ってるのと呆れ顔の律那を前に満面の笑みを浮かべる刹那確かに、この世界は嫌いだ。刹那にとっても律那にとっても生き難い。

交友関係も律那に杏那に執事。たった三人だけしか居ない狭い世界だ。

「んー、何となくそう思っただけ。」

だけど、刹那は満足していた。自分は凄く“幸せ者”なんだと感じた。

そんな刹那をジト目で見つめる律那。彼には全く理解が出来ないらしい。

（やっぱ、律には分かんないか。）

「幸せ者って何さ。」

「だって、俺今幸せだし。楽しいし。」

「馬鹿だねえ。せつちゃん。」

普通、悪魔は幸せ者って言わないよ。むしろ、卑怯者って言われて喜ぶのが普通だから。」

「良いんだよ。俺は、俺だから！」

「まあ、せつちゃんが良いなら律は良いけどね。」

そこまで面白くない事を二人して声をあげてカラカラ笑う。くだらないやり取りを、取り留めの無い事を話して笑う。

（・・・そういえば忘れる所だった。）

刹那は急に立ち上がると持ってきていたリュックからいそいそと目的の物を取り出す。

「？」

「ほら、今日から完全復帰だ。」

ずずいっと取り出した物を身を乗り出して律那の顔に近づける。近すぎて見えなかったのか、一度刹那の手から容赦なく叩き落とすと惨めにも床に転がったそれを拾い上げた。

「ああ、アールグレイ。」

律那に足を捕まれてひっくり返っているそれはアールグレイと名付けられた帽子屋の人形だ。

勿論帽子屋なためチャームポイントと言えば大きなシルクハットなのだが、律那に言わせると刹那と同じ紅い目のボタンがチャームポイントらしい。

律那はシラつとした顔でアールグレイを机の上に乘せると頬杖を付いて突いた。

何故、急にこの人形かと言うと、実は先日・・・

塔の下にて哀れにも泥まみれで所々破れたアールグレイが発見されたのである。

「投身自殺から奇跡の生還をしたんだね。にしても、見違えるように綺麗になったね・・・」

「馬鹿！お前が突き落とした犯人だ！！」

可哀相な状態のアールグレイの第一発見者である刹那の驚きは相当のものだったのだ。

その後の全ての予定を変更して刹那が救助に走ったのは言うまでも無いだろう。

「あんなにボロボロでもう助からないかと思っただぞ！ちゃんと白状しろ！」

投身自殺をしたと律那は言うが、どう考えてもそれは律那による他殺だろう。

何せ、アールグレイは動けない。

「はいはい。ぬいぐるみ一つで大げさだよ。・・・りっちゃんはどうんな凶悪犯なの。」

「リーっ」

「はいはい。りっちゃんがやりました。手が滑って落としちゃったの。」

「・・・まあ、わざとじゃないなら許すけど。」

落としてしまったら、塔の下まで行けない葎那にはどうにもする事が出来ない。

（しょうがない・・・のか。）

がくりと刹那は肩を落とすと、お遊び半分だった尋問は実に呆氣ない幕引きで終了した。

「あっ！それとー」

すぐさま気を取り直すと、刹那はもう一つリュックから取り出すと先ほどと同じようにずいっと葎那の前に突き出した。

そして今度は叩き落される前に刹那はアールグレイの隣にそれを座らせた。

「じゃん！！アールグレイが気に入らなかったのかと思って、見ろ今度は女の子だ！」

「あのねえ・・・」

得意げに紹介する刹那と呆れ目の葎那の視線の先には同じく大きなシルクハットを被ったアールグレイの女の子バージョンがいた。

別に葎那はアールグレイが気に入らなくて落としたわけでは無いのだが、刹那はどうやら男の子の人形が気に入らなかったと判断したらしい。

「・・・だからワザとじゃないって。てか、帽子屋が二人居てどうすんの。」

「わかんないけど、良いじゃんか。可愛いし、女の子少ないし。名

前はもう決めた。レディグレイだ！」

「ふーん。まあ妹的な何かって事にしとけば？」

「そうだな。それがいい！」

穏やかに二人の時は流れていた。

今日は刹那が呪い返しに失敗しなかったからだろうか。

それとも刹那の機嫌が良いからだろうか。

大きく開け放った窓から少し涼しいくらいの風が入ってくる。

暖かい気候というものが無く、寒さだけがある魔界では今が一番過ごしやすい季節だ。

これ以上寒くなると厚着をするために動きにくくなる。

刹那自身は寒いのは平気な方だが、それでも着込む。寒がりな杏那など雪だるまのように真ん丸になるくらいだ。

刹那は背後から来る風に顔を顰める。少し、風が強いようだ。

窓が開きすぎに感じる。実際、窓際に置いてあった物が散らばっていた。

（おいおい。良いのか？）

刹那は立ち上がり、窓際に立つ。

肌を直接撫でる風は先ほどよりもとても冷たく感じた。

少しだけ開けるように残し窓を閉めた。

振り返るとその場を動かず再度紅茶を飲む、先ほどよりも表情を失くした刹那の姿が刹那の目に入った。

願わくは、願わくは、希わくは・・・

このまま、
時よ止まってしまえ

Chapter 2 Call me 07・時よ止まって（後書き）

時よ止まってしまえなんて、そんな戯言。

本当は分かっていたんだ。これが、幻である事なんて。

悪魔とは別の生き物だからか、体のつくりが違うからか。

悪魔の自己主張の強い存在感の所為で、彼は素にしているのにも関わらず存在は空気のようなだった。

フードを深く被り何処からどう見ても怪しい変な人物なのに誰一人として彼に気付く事が無い。

良い事なのか、悪い事なのか。

この魔界でなら執事はその辺の石ころにでもなれる気がした。口を開かなければ、彼だと気付かれなければ・・・の話だが。

「一体、僕は何をやっているんだか・・・」

遠目で刹那を追いながら執事は一人こちた

“時”とは無情に過ぎ行くものだ。

そう、いつも思っていた。

止まってしまうばいい、と思った事は無い。

だが、永遠を手にしてみたかった。とでも言えば、聞こえは良いのだろうか。

ただ、自分が持っていない見た事の無い“未知”を手に入れてみたくなった。

人とは違う何かを手にして、人とは違う何かになりたかった。

今思えば、あの時の自分は何かの衝動に駆られるように行動していた。

何だってした。回りの事を傷つける事しかなかった。

傍に居た“彼女”はいつだって泣いていた。哀しそうに瞳が揺れていた。

それでも、止められなかった。

実際、手に入れてみればどうだ

あんなにも希っていた他の世界は、最初すら楽しいと思っていたものの今ではもう価値が見出せなくなってしまった。

“未知”は“既知”になった

永遠を手に入れて、それだけだった。

違うモノを求めて人ではなくなった。それだけだった。

ただ、それだけだった。

自分自身が変わっても、“時”は相変わらず無情に過ぎて行っただ。

だから、彼が羨ましかったのかもしれない。

自分を見失わずに歩ける刹那がどうしようもなく眩しかった。

だけど、理解などできなかった。

一心に守りたいと願い、行動できる刹那が。

（僕が、あの時彼女を利用するのではなく守るよう行動していたならば・・・）

何かが変わったんですか？

禁忌と呼ばれた葎那の金色の目が彼女のそれと被る

もう、すでに過去の事だ。

後悔などしない。そういう行動を進んでとってきたのは自分だからもし、例え過去に戻る事が出来たとしても執事はまた同じ行動をす

るだろう。

想像でも刹那と自分を重ねる事は出来なかった

（分からない）

また刹那が呪具に苦戦している様が遠目に伺える

刹那は気付いていないけれど、執事の位置からは丸見えだ。

諦める事無く真剣に、律那を守ろうとする刹那。

もっと、気楽に生きれば良いのにいつだって彼は手を抜かないで真つ直ぐだ。

コロコロと表情を変えて、処理しきった事に安堵し、達成感に満ちた嬉しそうな笑顔を浮かべる

（今日の所は、怪我は無し・・・ですか。）

何故、他人の為にそこまで出来るのか分からない。

馬鹿馬鹿しいと思う。

だけど、その傍らで、何故か悲鳴が聞こえる。目を離せない自分が居た。

主人の命だからだけでない。自分から気にかけているという感情に戸惑う。

何故、心が悲鳴をあげるのかが分からない。これが、良心と言うもののなのか

自分は、何を思っているのだろうか。

（・・・僕は、僕が分からない）

苦痛に満ちる顔を見るのが楽しいと思う。恐怖に歪む顔を見るのが好きだと思う。

自信の利害の為に動き、騙しあいや駆け引きも好きだと思う。それ以外の感情を執事は知らない。いや、分からない。理解が難し

い。

（悪魔に感化されたか）

人から足を踏み外してからと言うものの、人間らしい感情と言う物を置き忘れてしまった。

今や、人よりの感情を持つ刹那より悪魔達の方が執事に近い気がした。

（分からないです。昔は理解していたはずの感情が）

律那の金の目を見て、思いだす“彼女”

杏那の長い黒い髪を見て、その後姿を重ねた事もあった

だけど、恋していた訳じゃない。愛していたわけじゃない

もつと違う何かがあった。“彼女”に対しては言葉に出来ない特別な何かがあった。

“彼女”に対する気持ちも、杏那に対する思いも、律那に感じる痛みも刹那に感じる苦味も

みんな違った。だけど、それを明確に執事は理解できない。

「ねえ、六花・・・」

君なら、この気持ちの意味を教えてくださいませんか・・・」

穢れ無き雪の名を贈った彼女に、聞いてみたかった。

（もう一度、君に会えたならこの心の引っかかりが解けるでしょうか）

方法や力は違えど、同じく人から人で無い存在になってしまった彼女ともう一度だけ会いたいと願った。

もう一度、彼女の声でもう呼ばれなくなって久しい名を呼んで欲しいと願った。

律那を失いたくないと思ってしまふのは、金の瞳を六花と重ね合わせてしまふからだろうか。

彼女への罪悪感がそうさせるのか、彼女への執着心がそうさせるのか

この気持ちを、心を理解したいと無意識にも思ってしまうのは

本当は人と言う存在に戻りたいのかもしれないと、執事は心のどこかで他人事のように思った。

Chapter 2 Call me 08・白い雪の華に（後書き）

穢れ無き白い雪の華に

聞きたい、聞きたい、会いたい、触れたい・・・名を呼んで欲しい

最近、体が酷く重い

（呪い？いや、でも・・・）

呪いの臭いには人一倍敏感だと律那は自負している。

それに、気をつけているつもりだ。

塔の一室にはそれらしいものは見当たらないし呪いの臭いはしない。念のために行ける範囲で下に下りて探してみたが見当たらない。

刹那が持つてくる物も刹那がすべてチェック済みで、その上で念のため律那も確認している。

だから、律那の部屋に呪具が入り込むことはそう簡単な事ではない。

（ならば、この違和感は何？）

体に不調を感じる理由は思いつかないし、身に覚えが無い。

しかし何かと息苦しく感じるし、起き上がるのに苦労する。何より一つ一つの動作が動きにくい

律那は一気に年老いた気分だった。

最初は気のせいだと思った。ほんの僅かな違和感。

しかし、日を月を重ねるに毎に着実に段々酷くなっていた。

これを未だに気のせいだと言うにはあまりにも可笑しすぎた。

（だけど一体、どうやって・・・）

頭をフル回転させてみるものの、律那には皆目検討が付かなかった。最初に違和感を覚えた日。思い返してみてもその日前後から何か変わったことは無い。

特に律那が欲しいと願ったものは無いし、増えたのは刹那のお気に

入りの人形が数体だ。

献上品にしたって、結局気に入るものなんて一つも無いから殆ど捨てた。

稀に見る良い品だったから髪飾りなど数点手元に置いてはいるが、呪いはかかっていない。

見る目には自信がある。だからこれは絶対だと言い切れる。

例え、この症状が呪いではないとしても何の解決にもならない。逆に余計問題だった。

これが病だとするのなら、この魔界に居る限り治る事はない。

治そうと医者に見せた所で、そのまま重い病で治せなかったと逆に殺されるのだろう。

それならば、最後まで苦しみ負けず生き抜いてみせる。

まあ、体が他者より丈夫だと思っている分、病の可能性は限りなく低い。

いくら禁忌とはいえそれは瞳の色の話。

片割れである刹那も姉である杏那も体は丈夫であるし、律那も昔からそうだった。

自然に病にかかる事は、無いだろうと思えた。

（やっぱり、呪いかな？）

しかし、呪いの元が分からなければ対処のしようが無い。

馬鹿な悪魔達に殺されるのは癪だけれど、刹那が傷つかず自分だけならば問題は無いと律那は思う。

これ以上、刹那が傷つく所など見ていたくなかった。

刹那を一人残して逝く事になったとしても、嫌だった。

（それに、杏姉が居るからせつちゃんが独りになる事も無いし）

魔王になりたくないと思っっている姉は、決して刹那を見捨てる事は

無いだろう。

例えばそれが利用しているだけでも、杏那自身の為に行っている事だと律那は知っていたけれど、いつだって影で刹那を助けていた。経過など思惑などどうでもいい。結果的に刹那が守られるのであれば。

今回もまた上手く助けてあげてくれるに違いない。

刹那も魔王になりたくないと思っているのは知っているがそれは刹那の問題だ。

杏那が居れば幼少期は乗り切れる。その後、成長した刹那がどう行動したって構わない。

魔王になったって、逃げ出したって律那と言う重荷を背負う事無く生きていてくれるなら。

律那という存在に傷つけられずに生きてくれるなら、それで良い。

刹那は自ら命を絶つ事はしない。律那の後を追うような真似はしない。絶対に

真つ直ぐ生きて、そして何よりも人の心を大切にする人だ。

律那が一言“生きて”と言えば、杏那が一言“死ぬな”と言えば、刹那は死ねない

それに前を向いて歩ける人だから、きつと乗り越えてくれる。

そして、忘れる事無く律那を思ってくれるに違いない。

(・・・だって、律も悪魔だし)

自分の気持ちに正直で自分が一番だ。

何と言われようが、自分の願いが一番大切だ。

刹那の性格をよく知っている分、先の心配は要らないように思えた。

何日もの間、刹那を観察しても特に違和感はなく元気そのものだった

た。

刹那が葎那のように演技が出来るとは思えない為、呪いの影響は無さそうだ。

ならばやはり、このままで

後何日、騙し続けられるだろうか。後何回、刹那に会えるだろうか。
(後どれだけ、葎の体はもつのだろうか・・・)

刹那の前で演技し続ける事は難しくなってきた。

悟らせまいと強がってみるものの、限界は近いのだろう。
ただこんなにも長い間よく騙せたものだ、逆に誇ってもいい位だろう。

同じ事の繰り返しだった。

けれど、悪くは無かったその日常が崩れ始める音がした。

「ごめん、ごめんね。無力で・・・ごめんね。」

Alea jacta est . 『賽は投げられた』

だから構わずに、終焉を望んでしまったんだよ

寒色に彩られた寒々しい印象を受ける部屋

大きく作られた白い花だけが飾られているバルコニーに杏那と執事は居た。

珍しく二人揃って建物がひしめきあう城下の先、とても高い塔を見据えていた。

「律那君が・・・呪いにかかっているみたいです。」

「そうか。」

「刹那君は気づいて無いみたいですけど・・・大分酷い状態ですね。余程強い呪いようです。」

・・・あ、刹那君は至って元気です。」

「そろそろ、起こるかと思っていたが・・・やはり」

「ええ、起こりそうです。僕も今まで全然気付きませんでしたけど・・・」

あの状態を見るに、もう限界が近そうですね。」

声色を変える事無く目を細めて笑いながら執事は言う。

いつもの軽口を言うのと同じノリで報告する執事の態度に呆れたものだと杏那は思うがいつもの事だ。

（・・・律那には少し執着しているように思ってたんだが、な。）

チラリと横目で見る執事は同じ調子で今の弟達の状況の報告を続ける。

杏那は余程の事が無い限り律那の居る塔に近づけない。

城に居る時の刹那状況は杏那にも把握できているが、律那関係はそうもいかない。

弟達の状況を知るには執事に聞くしかなかった。

少しの間言葉を交わす二人の話口調や態度は軽いものの、二人にとっては実に嫌な状況だった。

杏那は手すりにもたれかかって大きなため息をつく。

そう、仮初の平穏が崩れるときが来た。

今までが、可笑しいくらいだったのだ。長い間、平穏な日々が続きすぎた。

このまま続いてくれれば三姉弟には良い事だったのだろうけれど、魔界で穏やかな平穏を求める方が無理な話だ。

しかしその平穏を極力伸ばす事に尽力したのは律那なのだろう。

いつから気付いていたのかは知らないが、本人である上に律那は聡い子だ。

随分前から知っていて、原因を探し一人で抱え込み、隠し通す事に決めたんだろう。

杏那は良くもまあ、隠し通したものだ和我が弟ながらに感心した。

（律のことだからな・・・）

見えない所で足掻いて、探して考えて・・・その結果、どうにもならなかったのだろう。

そして、どうにもならないと諦めた。

刹那の事は考えているにしても、自分自身の事は見捨てているに違いない。

「で？肝心の呪具は？」

「ちびっ子ながらに、呪いにに敏感な王族二人が見つけれられない呪いです。」

・・・僕には荷が重いと思いませんか？」

「お前な・・・」

自分は悪くないとも言つような態度で非を認めないのにまたも呆れる。

刹那・律那に見つけられないのなら仕方ない気もするが、流石にそれは無いだろう。

「年の功で何とかならんのか。」

それ以前にお前は力を全て見せてるようには思えないからな。」

「マスターは呪いに関してばかりき駄目ですもんねえ・・・」

そうですね。マスターには手も足も出ない苦手分野だから僕に頼るしかないんですよ。

といった副音声が聞こえた気がしてニヤニヤしながら小突いてくる執事に杏那は腹が立って思いつきりぶん殴ってやった。

「あいたつ！」

「ふん。呪いをかける事に関してアタシはプロフェッショナルだ。」

「いや、それ今の状況では全然胸をはれる事じゃないです。」

話を逸らすと言わんばかりに杏那はギンッと執事をにらみつけた。それに対し、やれやれと首をすくめて執事は答える

「はいはい。それでも、強い力を持つ一族の中で長年鍛えられてきたんです。」

そこら辺の使い魔や一般悪魔なんかは僕も負ける気はしません。

・・・が、流石に王族様よりは力が劣りますよ。

特に力の強い刹那君が気付かない呪具を僕が見つけれられるとも思えません。」

杏那は真偽を確かめるべく執事の顔を見詰めてみるが、嘘についているようには見えなかった。

執事の事だ、実の所しっかり探りは入れた上で見つけれなかった

のだろう。

ならば不得手である杏那には到底呪具を見つけるなど出来やしない。
ようは、お手上げ状態だ。

（様子を見ているしか、今まで通り見守るしか出来ないのか・・・）
「じゃあ、アタシらには何も出来る事が無いんだな。」

「いえ、夜逃げの準備は出来るかと」

間髪居れずにピシャリと言いきるデリカシーのデの字も無い執事の
発言に驚きで止まってしまっても、それは一瞬で。

しみりムードが全く続かない奴だと思いがちながらも、わざとそうし
ている事に杏那はうすうす気付いている。

本当に不器用な奴だと思いつつも、その心内を気付かれないようほ
んの少しの間を空けていつもの調子で杏那は答える。

「執事・・・お前は・・・」

いや、何も言うまい。最悪の事態の為に夜逃げの準備は出来て
るんだ。」

「流石マスター抜かりない」

クスクスと笑いながらそう軽口を叩いた執事も夜逃げの準備など
うに出来ているであろう事が伺えた。

その表情に杏那は苛つと来るが、同じ事をしている杏那も人の事は
言えない。

「・・・ゴホン。」

と・に・か・く！様子見だ、様子見。

例え律が呪いに負けたとて、アタシらに重要なのは刹の行動だか
らね。

出来る限りは守ってやるのが楽だけど。その後、どういう行動を
とるかいくつか予想は出来るが、どれになるかまでは状況によるか
ら。」

「良い方向に・・・ついでに面白く転がってくればいいんですけ

どね。
」

そう言つて執事は塔の方に顔を向けた。
横目から見た執事は遠い目をしていて、塔を見ているわけでは無さ
そうではあつたが

杏那もつられる様に塔に顔を向けると、ここからでは見えやしない
弟を思つた。

Chapter 2 Call me 10・崩壊の行き先（後書き）

繰り返す平穏の崩壊の行き先に何が待っているのか
予想は出来ても、断言など出来やしない。

「まだなのか、まだ・・・なのか。」

シンとした暗闇の中で憂いを帯びたか細い声だけが響く。

ささやかながらに吹く風はその鋭さを増して、凍えるような寒さがあつた。

青年が纏う物はボロボロの薄い洋服だけで、他に暖をとるようなものも無い。

それどころか暖を盗んでしまうような重々しい枷が両手両足を掴んでいた。

「いや、もうすぐに違いない。もうすぐ・・・」

悲しみに染まったその漆黒の瞳には何も映ってなどいない。いや、目の奥底に星の白銀に瞬いた小さな輝きがあった。

「もうすぐ僕の願いは叶うのだろう？ねえ・・・」

・・・僕はもう疲れたよ。」

・・・まがい物だからここにはもういられないんだよ。

本当は知っていた。これは本物から零れ落ちた小さなカケラだった事など。

- - - 必要の無いものならば消えるのが定めでしょう？

すぐにどこかに消えてしまふのでしょうか？

- - - 誰かに見つけて欲しかった。誰かに気付いて欲しかった

見つけたのはほんの偶然で、月が細い日に空を見上げたただけだった。

- - - 願いはきつと叶わない

二つに分かれて落ちた星の片方が塔に落ちていった。そっちが本物なんだろう。

- - - 願いは・・・叶わない

願いは叶わない。叶えられない。叶えてくれない。

- - - 結局はまがい物なんだ。

そう、結局はまやかしだと知っていたんだ。

消えてなど欲しくなかった。

手のひらに乗せた小さな小さな希望の星。

零れた涙で流されてしまいそうな小さな力ケラ。

切り離された存在であるこの星が、忘れられた自分を見ているようだった。

このまま縋っていたかった。

この閉ざされた柵を越えて行けたのなら、本物を探しにいったのに聳えた塀が、繋がれた鎖が、動かない枷が邪魔をする。

変えようの無い現実には止め処なく涙が零れた。

温かい光を放つ星が悲しみを混ぜた涙の色に見えた気がした。

暗い世界の中で一人俯いたまま嘆く。

元はサラサラだっただろう桃色の髪が嗚咽にあわせて揺れる。

希望を見出そうと、時に苛立ちのままに動き回った為に体中ボロボロだった。

心の痛みが強すぎて、体の痛みが麻痺したようだった。

地に爪を立て強く握るも感覚が無い。

もうどれくらいの年月がたったのか忘れてしまった。

孤独と言うものがこれ程までに辛いとは思ったことがなかった。

これは経験しないと分からない苦痛だろう。

涙の所為か、暗闇の所為か目が霞んだ。

月は欠け、空に浮かぶ星の光さえ届かない今、たった一つの小さな光がもう見えない。

「僕の名を呼んで・・・」

辛うじて淡い光を放っていた星が静かに消えた。
気が狂うような長い永い時の中、飽きる事無く願い続け、誰にも知られること無く一人死んでいった堕天使が居た

Chapter 2 Call me 11 儂く散り逝く(後書き)

儂く散り逝く星に願うよ。己の存在意義を。
たしかにそこには音が有った。

Chapter 2 Call me 12・終りの始まり

刹那是他愛無い話を律那にしている。

「それでな、それでー」

律那は少し離れたところで大好きな紅茶を淹れてくれている。

それは刹那が望んでいるいつもの日常。

今日は外が少し肌寒かった。だから、温かい紅茶が余計美味しく感じるだろう。

準備を終えたのか部屋の奥からトレーを持った律那が姿を現した。

「はいはい。せっちゃんが勿論勝ったん・・・」

不意に途切れる言葉

ガシャンと大きな音を立てて壊れるティーカップ。

これは好きだと律那が言っていたカップが粉々に散らばる。

床に染み渡る紅茶

「えっ？」

目頭を押さえて眉を寄せる律那

何か呟いたようだが、声の小ささか距離の所為か刹那には聞こえない。

そのままぐらりとその体は傾いて
まるでスローモーションのように・・・

「・・・律那！」

律那が、倒れた。

+++++

「大げさだよ、せつちゃん。少し目眩がしたただけだよ・・・」
小さな声で呟く律那の顔は心なしに青白く見えた。

動かない足を無理矢理叱咤し動かしてようやく律那をベッドに寝かせる事ができた。

震えが止まらない指先、珍しく強く鳴り止まない心臓

（・・・なんで、なんで、なんで！！）

ベッドの脇にしゃがみこんで律那の顔をうかがう。

どれだけ我慢してきたんだろう。どれだけ耐えてきたのだろう。
大切な人が倒れるまで、その不調に気が付かなかったなんて。

「泣かないでよ。せつちゃん。」

「・・・泣いて、なん、か」

律那の手がやんわりとした動作で刹那の頬に触れる

その指先には冷たく輝く涙の雫があった。

「ほら、泣いてる。」

「つう、だつて。」

（気付いてやれなかった。頼ってもらえなかった。
辛いなら俺を呼べば良いのに・・・！）

「大丈夫だよ。まだ、大丈夫。」

「・・・」

（まだ・・・なんて）

「ほら、律はちゃんと今生きてる。」

縋りついた律那の手は、温かく生きている音がしていた。

刹那の震えが伝わっているのだろう。頬に置いていた手を移動させ、頭を優しく撫ぜる。

律那の優しい手に、その温もりに刹那の震えが治まっていく気がした。

荒くなりかけていた呼吸を意識して戻すように深呼吸をする。

「落ち着いた？」

「ああ。」

温もりのお蔭か律那への不安や失う恐怖は和らいだものの、次第に自身への苛立ちが募ってくる。

刹那はシーツをきつく握り締めた。

（くそっ！俺は律那を守れないのか・・・！）

なんて自分は無力なんだろう。なんて自分はこんなにも未熟なのだろう。

力が欲しかった。大切なモノを守るだけの力が。

しかし、自分の力不足をこの場で嘆いて居た所で何も状況は変わらない。

最後まで諦めない。足掻いて足掻いて刹那に今出来る事は頑張るしかない。

落ち着いて律那を見ると調子は悪そうだが、彼の言うように“まだ”大丈夫な気はする。

しかし、何とも無いとでも言うような表情に少し焦りを感じた。

諦めの意思が見え隠れするそんな表情に刹那は一人眉を寄せる。

（俺はそんなに頼りない？）

「俺が・・・俺が！見つけてみせるから、治してみせるから・・・」

（無理だよ。律だって見つけれなかったんだから。）

「絶対だ、絶対。俺がお前を守ってやるから！」

（もう良いよ。律はそんなの望んでないよ。せつちゃんが傷つくのは見たくないんだよ。）

「だから、だから・・・」

「・・・」

律那の顔は泣き笑いのように歪んで見えた。

（そう簡単に、諦めるなよ・・・！）

その紅に映るのは先ほどまでの不安に揺れる色ではなく、先に進む揺るがない決意と強い意志が見て取れた。

Chapter 2 Call me 12・終りの始まり（後書き）

終りの始まり

それが終焉だと言つのならば、先の始まりをを探してみせる。

静まり返っているはずの城の廊下を大きな騒音を出しながら走る。
けたたましい足音と心臓の音がが不協和音を奏でるがそんな事知らない。

もう、構ってなど居られない。

葎那が倒れた。呪いが見つからない。

それだけが刹那の頭の中をグルグル回っていた。
どうする事も出来なくて、そんな不甲斐無い自分が情けなかった。
また流れそうになる涙を強引に腕でぬぐって、俯きがちな思考になる己を叱咤する。

走る、走る。

自身でどうにか出来ないのなら、他人に。一縷の望みに縋るしかない。

刹那が頼りにできる人など、葎那以外には魔界にたった二人しか居ない。

「姉様！じいや！」

目的の部屋に辿り着くと、思い切り良く扉を叩き開けた。

「そうか、葎が・・・」

遠い目をしながら一言だけ杏那は呟く。

刹那は今しがた起こった事を身振り手振り付きで精一杯詳しく話した。

もう、なりふりなど構ってられない。

そんな刹那の様子に杏那は人知れずため息をつく。

杏那は部屋の玉座に、執事と刹那はソファーに、お決まりの定位置に座っている。

大きな窓から見える塔は相変わらずピンと背を伸ばして立っていた。

「俺は、俺はどうすれば良い。どうすれば律那を助けられる？」

姉様、じいや・・・助けてくれよ・・・！」

「それは・・・」

「それは、残念ですけど僕たちでも無理です。刹那君・・・」

言いよどむ杏那の代わりに執事が淡々と答える。

「そんなぁ・・・」

「それでも、手を尽くしたんですよ？それでも・・・僕たちは力及びませんでした。」

肩を落とす刹那に普段よりは劣わる様な口調で執事は言う。

そんな様子を杏那は横目で見つつ、黙ったまま口を開かなかった。

「それにしても、君達が見つけれられない呪いをかけられる悪魔がこの魔界に居るとは僕は思えません。」

しかし、かけられそうな人物と言えば・・・」

目を細めながら告げる執事に刹那は息を呑む。

（・・・たしかに、そうだ。俺達よりも力が強い奴なんて・・・）
よくよく考えてみると、力が強く敏感な彼ら双子の上に行く悪魔なんてそう居ない。

双子よりも力の劣る悪魔達でも協力し合えば可能かもしれないが、基本個人主義の悪魔達が力を合わせて・・・など考えるはずが無い。

そうになると、純粹に力の強い悪魔としか考えられない。

「まさかつ、まさか・・・母様が？」

「いや、それは無いだろう。母上殿が葎を殺そうとするなら・・・あの人ならそんな回りくどい事をしなくても乗り込んでいつて自らの手で殺すさ。」

彼女は唯一葎を殺しても誰も咎められない。なんたって魔王だからな。」

刹那の頭に浮かんだ嫌な考えをすぐさま杏那は首を振って否定する。態々こつそり行動しなくとも、魔王である彼女は堂々と殺せる立場にあるのだ。

それは序列二位に位置する杏那もそれは同じ。

いくら杏那が呪いに特化していてもそこまで面倒な事を彼女はしない。

「それに、呪いにはかなりの労力を使います。僕が見ている限りでは・・・

あんなにも根気良く呪いをかけ続ける精神力が強い人など、そういないです。

だから、もしかしたら呪いでは無いかも知れないですね。」

「そつ、そんな！じゃあ、病気だっていうのか？」

「いや、そうとも言えないだろう。アタシと葎は良く似ている。双子のお前らよりも作りが似ているんだ・・・

自分の頑丈さはアタシが良く知っている。それは葎も・・・お前だって同じだろう。」

重々しく口を開いた杏那はまた刹那の考えを否定する。

「じゃあ、じゃあ・・・何だっけ言うんだよ。」

“何の所為”で葎那は苦しんでいるんだよ・・・！

悔しそうに唇を噛み締めて縋るように二人を見る刹那。

まるで我が事のように苦しそうな顔をする刹那の瞳には流れさえないものの、潤んで涙に歪んでいた。

「だから、アタシにはお手上げなんだ。刹」

「葎那君の知識力は魔界で右に出るものはいません。

その彼でも分からないのなら・・・」

言葉を濁した執事の後に続く言葉は何もなく、部屋を沈黙が埋め尽くした。

重い、沈黙だけを残して止まる会話

その問いの答えを持つものは、この場には存在しなかった。

思い切り駆け出したけれど、縛れる足に
どうしようもなく苛立ちを覚えた。

城の地下深くに続く階段を刹那は一人駆け下りる。

そこは城の内部よりも静寂が広がり、少し淀んだ臭いのする冷え切った空気が流れていた。

一段、一段降りるたびに冷える温度。吐く息が白かった。

太陽の当たらない場所、魔界の底へに続く道だ。

薄着な格好には堪える。コートを羽織ってきて正解だったと刹那は思った。

姉で自分よりも多くを持つ杏那も、違う世界から召喚された悪魔ではない執事も駄目だった。

律那の事を無いものとして扱っている母親など頼りに出来るはずが無い。

それでも、諦めたくはなかった。

（諦めるなんて出来ない。立ち止まったら、そこで終わりだ！）

階段を下り終え、大きな扉の前に立つ。

刹那の背の何倍も高さのある黒い羽と白い羽の模様があしらってあるその扉は城の中のどの扉よりも異彩を放っていた。

魔界にて天使を表す白い羽がある場所などどこくらいだろう。

天使の物も異界の物も多少紛れ込んでいる。唯一その存在を許された場所。

他の世界と一番近いとされる、そこは王家のものしか入れない書庫だ。

ここには貴重な物から、持ち出し厳禁の隠したい物まで何でも揃っ

ている。

答えを知る人が居ないなら、頼れる人が居ないなら

(・・・呼び出せば良いんだ。)

刹那は最後の賭けをするつもりで居た。

悪魔とは違った視点から原因を見つけてくれるかもしれない異界の者を呼び出せたなら、律那が助かる事が出来る気がして。

寒さの所為で鼻の頭が赤い。未だ寒さになれない体に鞭打って刹那は冷える扉に手をかける

長年使う人がごく僅かな為かすべりの悪い扉を体全体で押し開けるとむせ返る様な紙の臭いがした。

++*+*+*

埃っぽい空気に眉を潜めながらも、刹那は埃舞う書庫を手当たり次第にあさる。

刹那自身、本を読む事は苦手だ。難しい言い回しや難しい事は良く理解できない。

特にこの書庫は古い本や難しい本が沢山ある。刹那には普段絶対関わない場所だ。

しかし、一時期律那が暇を持て余して籠っていた事がある。

その時確かに言っていた。他の世界の記述してある本や使い魔召喚の為の本がある事も・・・

どんなに難しい事でも律那の言葉は覚えてる。
律那は言った。

「使い魔は便利そうだったけど、今の律達じゃ絶対無理そうだったよ。」

魔方阵も、詠唱も入り組んでいたけれど頑張れば出来ない事は無い。後、力は今の状態でも十分だと思うんだ。

だけど、コントロールが難しそうだね。そこが一番の難関みたい。優秀な使い魔にピントを合わせられるか。それが重要。変な物呼び出しても困っちゃうからね。

流石のりっちゃんも、そんな無謀な賭けに出る自信無いなあ・・・
切羽詰ったの目的があれば、何とかなるかもしれないけど・・・
今は難しそうだね。」

力は十分。難しそうなところは根気で頑張る。

刹那は今、切羽詰まってるし、律那を助けると言う絶対的な目的もある。そして意気込みも十分だ。

（今だったら、出来る気がする。）

・・・いや、絶対に成功させてやる！

大切な律那の為、なんとしてもやり遂げると刹那は使命感に燃える。彼の紅い瞳にはやる気の闘志が見えた。

沢山ある本棚を上から下まで睨むように見ていきながら本の背表紙に使い魔・召喚の文字を探す。

律那は何処にあると言っていただろうか。思い出そうと考えてみたけれど、流石にそこまでは言っていなかった気がする。

『天使の生態』、『Noir全集』、『追走曲外伝』、『凶悪なる魔物と魔法生物図鑑』、『x's Fantastic The

Magical Book」・・・

全く関係無さそうな本なら沢山ある。今は必要ないが刹那の興味引かれるタイトルもいくつかあった。

こんな本達に何の価値があるのかと疑問に思うが、ここにある以上何かしら曰く付きなんだろう。

それよりも、葎那がこの本全て読破していると言う事実には刹那は驚きが隠せない。

（しかも、内容殆ど覚えてるんだからな・・・）

こういう時は葎那の頭にあるサフィアが羨ましくなる。

一つ、また一つと本棚を見て回り奥へ奥へ刹那は進んでいった。寒さの所為と埃の所為で鼻がむずむずしてくしゃみが出そうだ。

『日常から復讐まで役立つ呪いベスト100』、『愛しい彼の殺し方』、『暗黒魔界史』、『Cross Knight 設定集』・・・

（ん？）

「こんな所にあつたのか・・・」

刹那は一冊の本を抜き取ると表紙を撫ぜた。

葎那が置いていったのだろうか、『Cross Knight 設定集』

は刹那が創り途中で放り投げていた物だ。

（・・・持つて行こう）

続きを後で創ろうと刹那は背負っていたリュックにしまう。

（・・・て違う！探してるのはこれじゃないだろー！！）

もう半分以上見たのか。それでもまだ一番奥まで辿り着く事はまだまだない。

刹那は大きく伸びをして体を解した。こういった作業はどうしても慣れて無いため辛い。

薄暗い部屋の中では目が疲れるが仕方ない。目元を掴んでマッサー

ジすると刹那は再度作業に戻る。

『黒の王の謎』、『涙姫』、『使い魔・・・』

「あつ、あつた！」

刹那の目線よりも高い列にしまわれたそれに飛びつくと抜き取った。

『使い魔の召喚法』

寒さの所為か嬉しさの所為か手が思うように動かない。

刹那は凍えそうになる手を握ったり開いたり繰り返して解しつつ、リュックから水筒を取り出す。

水筒に入れて持ってきた紅茶は保温効果でとても温かったが、いっつも入れてくれる律那の紅茶では無い所為か、急いで準備してきた所為か・・・

あまり美味しく感じなかった。

それでも先を目指す足は止まる事はせず
何があっても振り返らないと決めた

早速見つけた『使い魔の召喚法』の本を片手に刹那は本棚から移動する。

移動するといっても同じ書庫内だが、本棚から少し離れたそこは質素ながらテーブルと椅子が置いてあり少し開けた場所で本が読めるスペースだ。

傍らにリュックを置き、椅子の埃を軽く落として、少し咽ながらも刹那は座る。

刹那は頑張るぞと意気込みと共に本を開き始めた。

（順序通りに書き記す？ エッシャルグランド・・・呪文か、これは？）

難しい言葉の羅列で頭が痛くなる。

一ページ、いや一文字一文字頭に叩き込むように読み解いていくが刹那には酷く難しかった。

それでも、刹那は読む手を止めない。

（大丈夫。俺なら・・・できる。絶対理解も出来る）

何度も何度も同じところを繰り返し返し、何度も何度も行き詰りながらも難しい本を読み進める刹那はいつに無く真剣で凄い集中力だった。時にページを戻り、ゆっくりゆっくり時間をかけて少しずつ・・・

きつと以前に執事を召喚したと言う経験を持つ杏那に聞けばもっと早く理解出来るかもしれない。

すでに読み終えており頭の良い律那に聞けば良いアドバイスをもらえるかもしれない。

しかし、刹那が話をした時点で止められる事は間違いない。

（そんな事になったら、どうすれば良い？ 諦めるしかなくなる。

そんなの絶対に嫌だ。これが最後の希望なんだから・・・）
刹那は時間が経つのも忘れてひたすら一冊の本に向き合い続けた。

「っだー！」

奇声と共に刹那は本を放り投げ頭をかきむしる。
どれ位時間が経ったのだろう。時計が無いから時間の感覚が分からない。

外では刹那がいないと騒ぎになっているだろうか。きっと勉強の間をとくに過ぎている事は間違いない。

一応、書置きを置いてきたが役に立っているかは定かではない。

誰にもここにいた事は言っていない。もちろん杏那にも執事にも事情を知っている彼らは刹那の居場所を聞かれた時、誤魔化してくれるだろうか。

律那の為に飛び出して勉強や、やる事を投げ出して救う方法を探しているとなれば部屋に拘束されてしまう。

こんな辺鄙な所見つかると思えないが、後々が面倒くさい事になる。

机に突っ伏して放り投げた本を見る。

軽食にと持ってきていたパンや菓子類も食べ終わり、水筒の紅茶も随分冷えてしまった。

それなのにも関わらず、本の内容を完璧に理解したとは言いきれない。

それでも刹那にしては頑張った方だろう。七割、いや八割方頭に叩き込んだ。

だが、まだまだ不安な要素は沢山ある。

（・・・もういつその事ぶっつけ本番してみるか？）

だけど、失敗を考えると慎重に行動しなければならない。

絶対に成功させたいのだ。本にあったように使い魔ではなく凶悪な魔物なんて召喚してしまつてはたまつたものではない。

「うあーっ、ちょっと気分転換でもするかあ。」

立ち上がり伸びをしながら、凝り固まつた体を解す。

首や腰を回すと気持ち悪いぐらい豪快に間接の鳴る音がした。

刹那は先ほどまで見ていた本棚の続きをあさつてみる事にした。

一冊見つけた喜びですっかり忘れていたが、もしかしたら召喚の参考になる本が他にもあるかもしれない。

『迷路探偵物語・上』、『終わりの世界』、『宵闇小路』・・・

（無いなあ・・・）

見落としが無いよう一つ一つきちんと背表紙を確認しているが見当たらない。

これだけの冊数があるのに、関連する本が全く見つからないとなるとやはり存在しないのだろうか。

本棚を前に刹那は大きなため息をつく。

（そろそろ、読解を再開するか。）

よし、と気を取り直した瞬間。

「いつ！」

突然背後から頭を殴られた衝撃。衝撃とは言っても痛みより、驚きの方が上だ。

ビクリと持ち上がる肩に、背中に流れる冷や汗。

今まで何も感じなかったのに、急に恐怖で震え上がる体。

「クスクスッ」

いつから居たのだろうか、急に現れる存在感に刹那は身を竦ませる。
(この声、この存在感……！)

何故ここが分かった？何故ここに入れる？何故何故？刹那の頭の中を疑問がグルグル回った。

しかし、そんな事疑問に思っている暇は無い。

ギギギと音がしそうなくらいぎこちなく固まった体を動かし恐る恐る振り返り背後を伺う。

「僕の辞書に不可能の文字は無いんです。」

(ちよっ、怖ええええ！)

満面の笑みを浮かべた、いや、目だけ笑っていない最凶笑顔を浮かべ刹那を見下ろす執事の姿があった。

「いやあ、あの刹那君の顔！とっても素敵でしたよ。」

うって変わってにやかな笑顔で対応する執事に、机に突っ伏して生気を抜かれたような表情の刹那。

二人は本棚から移動し、開けたスペースで椅子に座っていた。

「あまりの驚きに尻餅まで付いて……」

「あーもう！いい！！……それより、どうしてここに？」

「どうして？って、マスター命令で刹那君の活動を見守りに。」

僕に隠れて何か出きると思います？」

「……」

クスクス笑い楽しそうに話す執事に刹那は投げやりだ。

からかいの所為か、見つかってしまった所為か悪戯がばれた子供のようにな貞腐れてそっぽを向いている。

「やれやれ、別に僕は君を咎めに来たわけでは無いです。

まあ、マスターには危ない事しそうなら縛ってでも止めると言われてますけどね。

今は刹那君本読んでるだけですし。危なくないので僕は止め無いです。」

「・・・うん。」

「しかし、その本を読んでいると言う事は、相当の覚悟があらひのようで・・・

ですから、これは僕からの餞別です。」

「これはっ、」

手渡されたのは、薄いノートのような冊子だった。

パラパラ捲つてみると手書きの右上がりな文字がぎっしりと書き込まれていた。

召喚の為の魔方阵や守るべきポイントについて詳しく書いてある。

刹那は目を見開いてノートと執事を交互に見やる。

(これは、姉様の字・・・だ。どうして?)

これでは危ない事を推奨するようなものではないか。

命令もあるのに、逆らうような真似までして手伝うような事してくれるのか。

「僕はこれから君が何を成すのか想像が出来ない分興味があります。

刹那君なら僕の期待を裏切らず面白い先を見せてくれそうですし・

・

もう、これ以上彼女を・・・いや、苦しみに歪む金の目など見たくないんですよ。」

「じいや?」

最後の方が小さな声すぎて刹那には届かなかった。

執事には不似合いな哀しそうな笑みを浮かべていた気がしたけれど、一瞬過ぎて本当に浮かべていたのかも分からなかった。

前髪に隠れた瞳には一体何を映していたのか。普段とは違う雰囲気を出した執事に、刹那はしっかり見ておくんだったと少し後悔した。

「なんでもないです。」

それでは！僕はマスターの本を書庫に置きに來ただけですので。

刹那君は方法を探して苦手な読書中です。

特に問題は無いので僕はこれで失礼します。

・・・勿論、マスターには内緒です。」

悪戯っ子のようにお茶目なウィンクをしながら執事は笑った。

Chapter 3 Hello Hello 15 彼女の残像に（後書き）

彼の思いと彼の願いと、彼女の残像に

全てが自分本位な世界の中で違うものを見出したい

執事が居なくなつてからと言うものの、先ほどよりも心なしか嬉しそうな顔で机に向かう刹那がいた。

貸して貰ったノートと探し出した本の二冊を照らし合わせながら読解を進める。

（・・・これ、分かりやすい！）

杏那のノートは凄く分かりやすく重要なポイントもしっかり押さえてあった。

彼女が使い魔召喚する際に自分用に纏めたものなのだろう。

使い魔に関する考察から、杏那が実際に行った時の順序過程や注意すべき場所など丁寧に書き記してあった。

基本、面倒くさい事が嫌いな人だが、急がば回れが出来る人だから。その下調べや下準備が半端無かった。

（姉様に感謝しなくちゃ。）

内緒なので本人には直接お礼は言えないが、心の中だけで言っておく。

驚きのあまり執事にもお礼を言いそびれている。

絶対に召喚を成功させて、執事が言う面白い先かは分からないが、律那を助けて大どんでん返しを見せてやろうと決めた。

それにしても、このノートは読めば読むほど面白い。刹那は難しい物は嫌いだし苦手だが、分かりやすい話は好きだ。

例え難しい内容の本が理解できなくても、律那が言い換えて話すその本の内容なら理解できた。

だからだろうか、少し砕けた口調で書いてあるそれは刹那にはとて

も読みやすいものだった。

長くの時と一緒にすごしていた訳では無いが、流石姉弟だけはある。自分が間に入らなければ交流出来ない姉弟だが、似ると言うのはそんな事は関係ないらしい。そんな杏那と律那に少し笑った。

読み進めると今まで自分では理解していたつもりだった箇所もノートを見ると実際理解していなかった部分もあった。

杏那の読解は斬新で別視点から見る考察に目から鱗の気分にもなったし、

失敗談を書く口調には悔しさが滲み出ていて悪いと思いつつ刹那は少し笑ってしまった。

（この調子なら、もう少しで・・・）

全て読み解く事が出来るまであと少し。

刹那は集中してラストスパートに入った。

（・・・よし）

広くなった部屋の中央で刹那は腰に手を当て一つ頷く

今まで使っていたテーブルと椅子を部屋の隅に引きずって置いた。

簡易的な代物だったので動かすのは思いのほか楽だった。これが城

の他の部屋だと豪華な物が多いので、そうはいかなかっただろう。

床の埃を少し掃除しつつ片付けたら、中々広い空間が確保できた。

逆に刹那の洋服が埃まみれになってしまったが、それは仕方が無い。

魔界の底、異界と一番繋がりとされるとされるこの場所で刹那は召喚をしようと思った。

本当は天使や異界の物が置いてある場所と言う意味合いではないのだが、何処よりも隔離され、異彩を放つ扉に守られ、何処よりも冷たい空気を纏うこの場所が召喚するのに相応しい気がした。

実際、杏那が執事を召喚する際にもこの場所を使っている。

ノートによると他に邪魔されずに集中できる場所が無かったためと書いてあるが、その通りなのだろう。本にもあるように場所は関係が無い。

しかし前例に倣う訳では無いが、ここなら成功できる気がした。

『使い魔の召喚法』の本を開きながら脇に置き、ノートを片手に作業を始める。

失敗は許されない。いや、下準備の失敗はやり直せば良いのだが、体力が持たない気がした。

実の所、ノートによるとこの下準備が一番大変らしい。

確かに記してある魔方阵の図面は複雑で入り組んでいて面倒だ。しかもそれだけではない。

魔方阵のあちらこちらには違った種類の属性の力を込めなくてはいけないし、正しい順序で書き記さなくてはならない。途中言霊の呪文も必要だ。

実に本番よりも大変な作業である。

異世界との媒体にする為の呪具・・・いや召喚具と呼ぶべきか。それは刹那のお馴染みの人形にする事にした。

兵士の姿をした人形、アッサム。この人形は他とは少し違う。

この魔界では珍しい宝石状のサファイアが左目のボタンの代わりに取

り付けてあるのだ。

サフィアを見つけた当時は貴重だと言われても、刹那にとって使う事は無いただの石ころ同然だったのだが、持っていて損は無いと刹那に言われて大切にしている人形の一つにくっ付ける事にした。

ほんの小さなカケラだが、それがこんな所で役に立った。

サフィアは力の象徴、そして力の源。これに刹那のありったけの力を込めて媒介にすればこれ以上無い召喚具となるだろう。

刹那は瞳を閉じ、一つ大きな深呼吸をして緊張を和らげる。

さあ、ここからが正念場だ。

Chapter 3 Hello Hello 16 未来計画始動（後書き）

幸せ未来計画始動

幸せで楽しい未来が見える気がした。

忙しく部屋を駆け回り、時にブツブツ呪文を唱え、力を込める為に座り込む

一見知らない人から見れば奇妙な行動だが、やっている本人はとも真剣だ。

あーじゃないこうじゃないと独り言を呟き、ノートを捲る。

その額には汗が滲み、張り詰めた意識の所為だけでなく力の消耗も伺えた。

それでも、作業は休む事無く続く。一度止めたら、二度とこの集中力は出せない気がした。

刹那以外の静寂に埋もれる部屋にピンとした空気が張り詰めていた。

「・・・完成だ！」

冷えた室内にも関わらず出た汗を拭くと刹那は満足そうに目の前の魔方陣を眺める。

下準備はこれで完璧だろう。

可笑しなミスも無くスムーズに事を終えることが出来た。これも全て杏那のノートのお蔭だろう。

後は、呼び出すだけ。

この先からは刹那の力量とコントロールの問題だ。

（大丈夫だ。俺なら、召喚できる）

刹那の為に、心の準備も万端だ。

喉が張り付いて言霊が言えないなんて事は困ると思い、

もう温もりが一切無くなってしまった紅茶の最後の一杯を水筒からいれると思い切り良く飲み干した。

空になった水筒をリュックにしまい込むと邪魔にならないよう遠くへ放り投げる。

その後、刹那は気合を入れて魔方陣の前に立つ。

それは半径五メートルはありそうな大きさで、複雑に文様や文字が絡みついていていた。

刹那から見て魔方陣の上部、彼の立つ位置とは反対側に位置するそこには不釣り合いな可愛らしいアッサムの人形がちょこんと座っている。

小さなカケラにありったけの力と願いを込めた。

一通り魔方陣を見渡し、最後の確認すると何度か深呼吸をし心を落ち着けた

そして、大きく息を吸い込んだ。

「我が声が聞こえし者よ、我に力を与えし者よ！

我が名は“刹那” 汝を統べる者

この声を導に我が前へ来い！！」

力を乗せた声を魔方陣に向かって張り上げる。

それに呼応するようにアッサムが浮かび上がり左目が輝いて魔方陣

の中央に向かう

手を前に突き出し刹那は力を魔方陣に集中させる。右に位置した十字が光り、左に位置した呪文字が溶けた

息苦しさに眉を潜めるも、まだ見ぬ異界の地に神経を集中させる汗が頬を伝うのが分かるが、絶対にここで焦ってはいけない。

（・・・見つけた！）

力に引つかかる確かな感触を見つけた。どこか遠くから呼応するノイズがかつた声が聞こえる。

刹那は足が震えるのを感じながら、激しく鳴り響く地鳴りの様な音に耐えた

すると、魔方陣は眩いばかりの光を放って周りを回るように徐々に風が舞い踊る。

同時に部屋中に広がるむせ返る様な甘ったるい香り

（これは・・・花・・・か？）

刹那は花に詳しくない為なんの花かは分からない。

ノートにはこんな匂いの事など書いていなかったのに、これは召喚される者の違いだろうか

その風は止まる事無くどんどん強くなる。それは魔方陣の前に立つ刹那にも襲い掛かり軽い刹那は足に力を入れていないと簡単に吹き飛ばされてしまいそうだ。

不思議な事に刹那以外の物には何の影響が無いらしい。

これだけの強風が吹いていても近くの本一つ飛ばない。

「っ・・・！」

あまりの突風に腕を前にして顔を庇うが目を開けていられない。

しばらく踏ん張っていたが耐え切れずに少し飛ばされて後ろに尻餅をついた。

地に近くなつたからか、吹き飛ばそうと吹く風とは逆に魔方阵の中に力ごと体を引きずり込まれそうになる
これに巻き込まれてはいけない。

魔方阵の中に体の一部分でも入ってしまったえば召喚するどころか逆に飲み込まれてしまう。

チカチカして目が痛い。風は止まない。

それでも見つけたものを離す事はなかった。

じわり、じわりと何かの気配が魔方阵の中央に現れている感じが分かる。

召喚に成功しているのだろうか。未だ魔方阵の様子が伺えない。

何だろこの感じは。刹那を感じる執事とも違う威圧感があった。

刹那の背中に冷や汗が流れる。怖い。どうしようもなく凶悪なものを呼び出してしまったのではないか不安で仕方が無い。

それでも、ここで止める事はしない。止める事は出来ない。

（・・・何か居る！）

気配が完全に現れたと同時に風が少しずつ止んでいくのが分かる。

魔方阵から感じる威圧感も徐々に減って言った。

全てが元に戻る。魔方阵の中の気配だけを残して。これが召喚終了の合図だ。

力を使い果たした刹那は荒い息を繰り返す。

眩しさの所為で目を瞑っているのに目が可笑しな感じた

周りの空気が正常に戻っていくのが分かる。花の香も薄らぐ。

目を閉じていても気配が動くのが分かる。

使い魔と対面しようと刹那は早く落ち着くよう努めた。

ようやく落ち着いた刹那は薄っすらと目を開いた
その視線の先に未だ光を放つ魔方陣の中に小さな人影が映った。

Chapter 3 Hello Hello

17 ·

Hello Hello

Hello Hello Hello!

こちらの声が聞こえますか、どうぞ

（・・・ん？小さな人影??）

視力が早く回復するよう擦りながら刹那は目を凝らす

先ほどの風の影響で砂埃が舞って視界が悪い

人がちゃんと存在している事から召喚には成功しているようだが。

「っ、誰か・・・居るのか？」

「！」

埃で喉が咽る。力を使い果たした所為か、刹那が出した声は小さいものだった。が相手には届いたらしい。

パタパタとこちらに移動してくる足音が聞こえる。

それを固唾を呑んで待っていた刹那だが、にょき！と刹那の目の前に現れたのは同じくらい小さな子供

こちらを見る真ん丸い大きな茶色い目がキラキラ輝いていた。

華奢な体に刹那と同じくらいであるう小さな背。

魔界ではあまり見ない随分と可愛い洋服を身に纏い、その愛らしい容姿は庇護する立場ではなく逆に庇護をしなければならぬように感じる。

余程嬉しいのかギザギザな尻尾がゆらゆら揺れていた。

張り詰めていたものが一瞬で緩んで、刹那は一気に脱力した。無意識に止めていた息を思い切り吐き出す

目の前のものは想像していたものと全然違う。

執事のように大人な人が出てくると思っていた。

勿論人型ではない使い魔も存在する。気高く強そうな獅子の様な使い魔を想像し、そんなのも良いと思っていた。

しかし、刹那の目の前にいるのは・・・

（何だ、子供じゃなか）

使い魔は尻餅を付いている刹那にあわせてしゃがみ込むとずいっとキラキラした眩しい笑顔で刹那に近づく。

「あなたが、ましたーなんてしね！」

（・・・ましたー？）

「しゅごいでし、しゅごいでし！中々辺鄙な所に一族はいましゅから、召喚しゃれる事なんて無いと思ってたでし。」

（・・・はい？）

使い魔から矢継ぎ早に繰り出された言葉はサッパリ何語だか分からない。

刹那が混乱している所為もあるのだろうが全然頭に入ってこなかった。

こういつては何だが、刹那の頭の回転はそう速くない。

付いていけずに目を白黒させながら頭にハテナが浮かべているのだが、目の前の使い魔には全く伝わっていないらしい。

使い魔は長い袖を振り回し楽しそうにマシンガントークを続ける。

「ましたー！ましたーはしゅごく強いんでしね！ビックリでし。うちの一族を呼び出すのは本当に難しいんですよ。

あつ、ましたーまじゅは何をしゅれば良いんでしか？悪者退治でしか？それとも人だしゅけでしか？こう見えて家事も得意ですよ。

でもその前に・・・」

「ましたー、お名前くだしやい」

使い魔に名前を付ける事で契約が完了する。
はっと刹那はノートに書いてあった事を思い出す。
ようやくシヨートしていた思考回路が戻ってきた様な気がした。

+

「・・・えーと」

「(ワクワク)」

「・・・んーと・・・」

「(キラキラ)」

「・・・」

期待の籠った視線で見詰めて来る使い魔に刹那は遠い目をするしかなかった。

刹那は名前など全く考えていなかった。召喚すると言う事しか頭に無かった所為である。

そのため熱い視線が非常に苦しい。

その場では言われても、急に思いつくほど柔らかい頭を刹那はしていなかった。

なるべく目の前の使い魔を視界に入れないように逸らすと、ふと刹那の視界に可哀相にも埃にまみれてうつ伏せに転がっているアッサムの姿が目に入った。

そして、ピンと名案が刹那の頭に浮かんだ。

(・・・これだ！)

「そうだ、お前は“ニルギリ”だ！」

どうにか普段の落ち着きを取り戻した刹那はいかにも堂々と名を宣言する。

「ニルギリ・・・ニルギリ・・・！じゃあ、ニルでしね。

うふふ。とっても、しゅてきです。このお名前をニルは大切にし
ゆるでし。」

周りに花が飛びそうな笑顔で幸せそうに笑うニルギリ。
そんなニルギリを前に刹那は顔が引き攣るのを感じた。

（・・・言えない、さっき飲んでた紅茶の名前だなんて・・・）

ようは、適当だ。しかもぬいぐるみに名前を付けるノリだ。特に由
来なんて無い。

「あはは」

（うん。まあ、“執事”と名付けた姉様よりはましだよな。うん。
きつと。

ダージリン・アッサム・ニルギリで三大紅茶だし。媒介にアッサ
ム使ったし・・・

後付けだけど聞かれたらこう言おう・・・）

それに何より、名付けられたニルギリは幸せそうである。

本人は名前の意味を理解はしていないだろう。多くは突っ込むまい
「うふふ。」

刹那の空笑いとニルギリの幸せそうな笑い声が書庫に響いた。

何はともあれ、刹那は無事使い魔の召喚に成功し、契約する事が出
来たのであった。

はろー はろー はろー！

そちらの声しっかり聞こえます、どうぞ

ニル語

『さ』と『す』が言えない為にもはや暗号。
頑張って解読してください。

「それで、ニルはまず何をすれば良いんでしか？」

首をかしげて能天気には喋るニルギリの姿に刹那はハッと我に返った。
こんなのにびりと、のほほんとしている場合ではない。

律那の容態は一刻も争うかもしれないのだ。

こうしている間にも、塔の部屋で律那は一人苦しんでいる事だろう。

「お前、呪い解けるか？しかも、うんと強いやつ・・・ いや、呪いかも分らないんだ。その“何か”をお前解けるか！」

刹那は胸倉を掴み揺すりながら、必死に問う。

先ほどのまでの穏やかな空気は何処に行ったのか、顔など切羽詰った酷い顔だ。

なにせ、大切な片割れの命が掛かっている。

刹那にとって、ニルギリが最後の希望なのだ。

「落ち着いてくださやああああい！」

苦し・・・ギブ・・・ニルもう、ギブでし・・・！！！」

思い切り詰め寄られたニルギリは言葉通りに今にも沈みそうな顔色だ。

詰め寄る刹那の勢いよりも増して、口から何かが出て行きそうな勢いである。

「あつ、悪い・・・」

「ゲフッ、大丈夫でし。ニルは強い子でしから。」

胸元の洋服の皺を伸ばしながら深呼吸を繰り返す姿は全く強い子には見えないがどうなんだろうか。

召喚の際の威圧感は錯覚かと刹那はいささか疑問に思った。

(どうも、こいつとは接し難いな・・・)

どんな空気でも一瞬にしてほんな雰囲氣にしてしまつニルギリに脱力する。

「で？」

「言葉で言われただけじゃ分らないでし。実際見てみないと」

「よし！じゃあ、早速行くぞ！！」

ふっ、
ふええええええええええ！！！！」

思い立ったが吉日とでも言うように、言葉と共に刹那はニルギリの手首を掴むと無理矢理駆け出した。

「
ぴ
え
え
え
え
！」

何やら奇声が聞こえる気がするが気にはしない。

例えば、ニルギリがどう思おうと葎那の元に一刻も早く行く事が最優先だ。

刹那は無造作に開け放ち、長い長い階段を駆け上がる。

早く早くと急ぐ心は来た時と違い、昂っているのを感じた。

段々と温かく感じる温度に、一步一步太陽に近づいていく感じに、心が軽くなっていく気がした。

そう、それに今は一人じゃない。

刹那にはチリと後ろに視線を向けると、引き摺られる様にして状況を理解できずに目を回しながら付いてくる自身の使い魔にため息を

一つ零した。

ドタドタと大きな音を立てて廊下を駆ける子供の足音が聞こえる。
こんな音を立てて、城を移動する者など刹那しかありえない。

しかし、普段ならば刹那一人きりのはずなのに何故か複数に聞こえて自室に足を進めていた杏那と執事は驚いた。

内容までは聞き取れないが、大声で話しながら走ってもいるようだ。その所為で、酷く騒音に聞こえる。

「刹那様・・・と誰でしょう？」

（もう一人と言う事は、使い魔の召喚に成功したと。さすが王族様ですね。）

「いや、知らない。そもそも子供なんて城内に入れないだろう。」

近づいてくるのを見る限りどうやら、刹那と同じくらいの背のようだ。

「おい、刹・・・」

「ごめん姉様、じいや！俺、急いでるっ！..」

慌ただしくこちらに目もくれないで嵐のように過ぎ去ってしまった。
杏那の途切れた言葉と、中途半端に上げられた右手が哀しい。

抗議しようにも、バタバタ過ぎていったその姿は遠かった。

勢いがあつたために一瞬しか顔は見る事が叶わなかったが、ギザギ

ザの尻尾が揺れるその後姿が執事の目に焼きついた。

（まさか、まさか、いや、まさか・・・）

止まる事無く過ぎ去っていった人物に執事は信じられない・・・いや、信じたくない気持ちで一杯になった。

しかし・・・

横にいる杏那の顔を見る。

珍しくもキョトンとした表情のまま通り過ぎた二人の方を向いており、その瞳は執事を映す事は無かった。

（姉が姉だけに弟も弟なのですか・・・）

呆れと脱力感で今の顔は相当酷い物であろう事が、自分でも分った。偶然と言ふのには性質の悪い合致であろう。執事は思わず大きなため息を一つついた。

「む？なんだ、もしかしてあの子供じいやの知り合いだったか？」

「ええ・・・不本意ながら、知り合いかと思われます。」

夢であつて欲しいですと執事は、珍しくもその顔を引きつらせながら頂垂れた。

始まったのは外側の日々

サヨウナラ。これでお別れだけど、どうか、オゲンキデ。

今のこの気持ちに名前を付けるのなら、一体何なのだろう。

驚愕、感謝、安堵、嫉妬、恐怖・・・

こんなにも、“他人”が頼れる存在であるだなんて知らなかった。自分に出来なかったことを悠然とやってのける存在に少し畏怖を感じたのは愚かな事だろうか。

そう思うほどに、自身の世界は狭かった。

++*+*+*

この世界には、その存在を排除するように目に付く事が無いようにと作られた牢獄が二つある。

その一つが、この目の前に聳える背の高い塔である。

一際目立つ存在ではあるものの、塔の天辺は日の光が邪魔をして視界に入れるのが難しかった。

「っ・・・ハアハア・・・ここだ。この塔の上に・・・」

「ここでしか？」

城からある距離の所為で、刹那の息は上がっていた。

心臓にサフィアがあるお蔭で動悸は穏やかなのがせめてもの救いだが、息切れはどうにもならなかった。

一方、不思議そうに塔を見上げるニルギリ

華奢な体の何処に体力があるのだろうか。

息切れ一つ無く変わらない様子のニルギリに刹那は声は出さずとも驚いた。

（こいつ見た目と違って・・・）

やはり、子供といえども力の強く流れる様な綺麗な魔力があると言われる王族が召喚しただけの事はあると言う事なのだろうか。

そんな観察するような主人の眼差しに気付く事無くニルギリは刹那の手から離れると、長い袖をまくって手を出し直接塔に触れながらペタペタと調べ始める。

のほほんとした様子からは想像もつかない真剣な様子に刹那は口を挟めなかった。

「この塔からネガイボシの気配がしゅるでし」

「ネガイ・・・ボシ？」

「そうでし！ナガレボシとも言うでしけど。」

ナガレボシとは空に浮かんでる星が落ちてくる事だろうか。

（一体、それが何に関係があるって言うんだ・・・）

ニルギリの発言に刹那の頭にハテナが浮かぶ。

「あれ？知らないでしか??」

「ああ。」

「ネガイボシって言うのは空から落つこちてきたお星様の事でし。

ネガイボシには願いを叶える力が宿っているんでしょ。

だから、ネガイボシを拾った人は願う事が出来るんでし。まあ、

願いが叶うには条件があるんでしけど・・・」

「それじゃあ・・・！

その拾った奴が律那を苦しめるよう、殺すよう願ったって事が！

！」

刹那の言葉に大きな目を細めるニルギリ。

「うーん。叶っては無いみたいでしょ。ネガイボシは願いを叶え
と消えるんでし。」

でも、確かにここにはネガイボシがあるでし。だから・・・

「じゃあ！何で律那は苦しんでるんだよ！どうすれば・・・」

うひゃっ、おっ、落ち着くでし・・・」

前回の事を思い出したのか、刹那の勢いに顔を青くしてニルギリは
後ずさった。

両手を前でブンブンと振りながら塔に背を預け、顔からは冷や汗が
落ちる。

「ええっと、あの、その・・・あれ？」

しどろもどろに焦るニルギリの表情が変わった。

そして背中をピトリと塔にへばり付いた状態から抱きつくように塔
にへばり付いた。

ニルギリが何かに気付いたように顔を顰める。

刹那を無視する形で体全体で原因を探っているようだ。

そんな様子に刹那は眉を寄せるが何も言わなかった。

「詳しくはニルも分らないし、もっと調べないと何とも言えないで
しけど

うっーん。やっぱり・・・この塔気持ち悪いでし」

頬を塔にくっ付けている状態のニルギリは言葉通りに顔を青くする。

（気持ち悪い？）

塔に気持ち悪いだなんて感じた事は無かったし、塔に居ても刹那に
は辛いとも何も感じなかったと言うのにニルギリは感じると言っ
のか。

「律那ちゃん？でした？ この塔に居るんでしょね。」

「？ そうだ。」

「こんな所に居たから・・・うん。」

ニルが思うに律那しゃん？は関係無いんでし。

だって“この塔からネガイボシの気配がしゅる”んでしから。」

「・・・どう言う事だ？」

「だから、

塔にネガイボシの願い・・・呪い？ が掛かってるんでし」

「は？」

「ようは、律那しゃんは巻き込まれてるだけでし。この塔に居るから辛いんでし。」

「・・・引つ越せば直るんじゃないでしか？」

「・・・」

考え付きもしなかったあまりの解決策に刹那は声が出なかった。

塔は口を閉ざし何も語らない。 しかし、
それは君の為じゃない “他人”にとっては雄弁で

俗世から切り離された塔に似つかわしく無い、ドタドタと荒々しい足音が聞こえる。

こんな風にやってくる人は一人しか・・・

（一人じゃ・・・無い？）

聞こえる音はいつも聞きなれている音ではなく、葎那の耳に不協和音を放っているように聞こえた。

こんな場所に来る悪魔などたった一人しか存在しないというのに何故（どうして？）

今や僅かでも動かすのが億劫な重い体をベッドのから持ち上げると、葎那は黒い感情が湧き上がってくるのが分った。

深呼吸を一つ

したつもりで、口から出て来たのは重い重いため息だった。

段々と大きく近づいてくる騒がしい音。

好きだと思ったこの瞬間が、苦々しい思いと共に頭に響く

（カウント・・・三、二、一）

「・・・葎！」

バンっ、と息を切らしながらも嬉しそうな笑顔で勢いよく扉を開け放つ刹那が居た。

「えっ、えっと、葎那ちゃん？」

そして、その後ろに不協和音の元凶であるであろう同い年位に見える可愛らしい子供が居た。

（ああ、全部葎の為なんだね・・・）

悪魔ではありえない羽の無いその姿に、全てを悟る。

「いらっしやい。せつちゃん・・・と・・・」

だけど、葎那は笑うことなど出来やしなかった。

「葎！この塔から出るぞっ！！」

「行き成り何を・・・」

「そうでし、引っ越すでし。」

状況を理解していない葎那を置いて刹那とニルギリは荷造りを始める。

元々、物に執着の薄い葎那だから部屋に物は少ない。

大きめの袋に詰め込む物など刹那の人形と少しの日用品くらいなものだった。

「ちょっと、何なの。それにその“しっぱ”は何？」

「しっし、し、しっぱってニルの事でしか・・・！」

大きな目に涙を潤ませられたって、初対面であり名前を知らないのだから葎那には呼ぶに呼べない。

分ったところで、大好きな刹那の近くに居る奴をちゃんと呼ぶ気は葎那にはこれっぽっちも無いのだが。

こんなちんちくりん、しっぱで十分だという思いが葎那の大半を占

める。

（なんかムカツク、気に食わない。）

唯一執着している刹那を取られた様な気がして、律那はイラついた。

「ああもう！説明は後回しだ。黙って俺に着いて来いっ！」

袋に詰め終わった刹那はそれを背に担ぐ。

嵩張りはするが、殆ど綿だ。見た目よりはずっと軽い。

刹那は律那を見、動くのが辛そうだというのを感じて袋を預けて自身で担ごうかと思ったがニルギリを見てやめた。

（何なの・・・）

「行くでし！」

元気な掛け声と共に軽々とニルギリに担がれた事に律那はギョっとした。

華奢で力など無いような奴が、身長が変わらない人を持ち上げているのだ。

律那は驚きと苛立ちが顔を染めるのが分った。

止めさせようにも動きの悪い体が憎らしい。

ならば言葉で反論を・・・とも考えたが、すぐに律那は馬鹿らしくなった。

（もう、どうにでもなれば良いよ・・・）

何で、律がこんなちんちくりんに悩まされなくちゃいけないの

地に足が着かない不安定な状態で律那は思わず脱力し、諦めた。

そして、抵抗と足掻く事を投げ出した。

「よし！」

刹那はニルギリの可笑しさに驚いては居ないようだった。

律那の為に刹那は使い魔を召喚した。

それは説明されなくても頭の良い律那には分った。

そしてすぐさま葎那の元にやって来たことだろう。

ならば、ここに来る前にその非凡さをその力を発揮しているという事
(このギザギザしっぱ、見た目によらず中々侮れないんじゃないや・・・
ん？ギザギザしっぱって・・・)

ふと、葎那の頭に何かの書物で読んだ一文が思い出される。

羽の形をした羽耳、ギザギザの尻尾、容姿の色素は茶系・・・す
べてがこのニルギリの特徴に当てはまった。

(まさか、夜羽族？嘘でしょ、これで精霊最強種・・・！)

ニルギリに担がれながら階段を降りる最中、葎那は開いた口が塞が
らなかった。

Chapter 4 Day of outside

21 信じるよりも（後

信じるよりも疑いたくしょうがないんだ
少なくとも、君の事は。だって、ムカツクでしょう？

この塔を降りるのは、いや、この塔から出るのはどの位ぶりなのだろうか。

出られるとは思っていなかった。いや、出ようとすら思っていなかった。

自分で動こうとしなかった。

長い間、無意味なことなど数えなかった。

前を歩いている者も、自身を担いでいる者も

何もかも自分で進んで、掴んで、作っていく者達だろう。

その眩しさに、目眩がする。

案外、今までの生活が自分の一部になっていたことを感じ、律那は自嘲した。

自分は自身の足で進むことが出来るのだろうか。

地面と言う物が、酷く久しぶりだった。

* * * * *

塔の下は場所だけに人の寄り付かない所だが、人目を気にしてキョ

口キヨロしている二人の様子はまるで泥棒、もしくは誘拐犯だ。
刹那は大きな目の袋を背負っているし、ニルギリはこの国の“王子様”を担いでいるのである。

実行犯の年齢が低いだけに怪しい、と言う以前に何とも滑稽な図ではあるが。

そう想像して、盗まれている最中である宝物に位置する刹那は何とも言えない気持ちになった。

「刹那しゃま！これからどうするんでしか？」

「そうだな、とりあえず刹那を俺の別荘にでも隠して・・・」

ボク・・・×　よ

「ねえしつぽ、下ろしてよ」

「・・・しつぽ」

文句を言うようにニルギリはしつぽと呟く。

すぐに行動に移そうとしないので思い切り尻尾を引っ張ってやると
渋々刹那を下ろした。

久しぶりの地面は重い体に悩まされる刹那にとって硬く反発し、踏ん張らなければ揺らいでしまう気がした。

重力のままに地に座りたい気になったが、そんな様子はおくびにも出さない。

もちろん、刹那のプライドに賭けてふらつくなどと言う事はしない。

「葎、無理すんなよ。」

慌てて刹那が駆け寄ってくるが無視した。

ニルギリがもう一度担ごうとするように伸ばした手を叩き落とす。

そんな物よりも葎那には気になるものがあつた。

あ ル × × ・ 名

（ノイズ？）

「葎那しゃん、調子はどうなんでしか？」

「そうだ！塔から出て何か変わったか？」

心配と言う名の感情を向けられて酷くむず痒かった。

あからさまに他意の無いその感情を嫌だとは思わない。
が、葎那自身向けられたいかと言われれば否だ。

口には出さないが、放つて置いてくれれば良いのにと思わなくも無いのが本音だ。

（・・・塔から出て？

体は相変わらず重いし、軋むし、動きにくいし

あれ、でも・・・そう言われてみると・・・）

「・・・体は重いけど、息苦しくなくなったね。 それに、悪い感じはしないよ。」

確かに塔を出て何かが変わったと、葎那は感じる。考えれば、考えるほど意味が分らなかった。

もう一人得体の知れない自分が入り込んできたような・・・
否、自分以外の感情が流れ込んでくるようだ。

（何、何なのこんな知らない。）

安堵、開放感、達成感、歓喜

うれしい

「何これ、出られて“嬉しい”の？」

流れて伝わってくる物に、悪いものは感じない。

確かに律那自身、塔から出るのが久しぶりで開放感があるのは否定しない。

（けど・・・）

出たことに律那は嬉しいとは感じない。

すっかり流されて外まで出てきてしまったが、今まで出られるのに態と出なかったのだ。

何故なら連れ出したら刹那が罰せられるから。

刹那が苦しむのに繋がる行為を律那がどうして嬉しいと感ずることが出来るのだろうか。

「・・・律は“嬉しい”・・・の？」

「律那」

うれし　い　　よ　　×　　名前　×　　・　　・　　×

律那の意思とは関係無く、一筋の涙が零れ落ちた。

初めて見たといっても過言ではない律那の涙に刹那は息を呑んだ。

胸を押さえて考え込む律那は、眉を顰める刹那に気付くことができなかった。

Chapter 4 Day of outside

22・成れの果て（後

Paranoia症候群の成れの果てへ
誰かの声が木霊する

「それで？」

「それで・・・？ なんだ？」

少しは良くなったと言っても、未だ青白い顔をしふらつきそうな葎那に刹那はハラハラさせられるのだが
言われた言葉に首を傾げた。

「だから、この先の話し。

葎がせつちゃんの別荘に行くのは構わないけど、この塔どうするつもりなの？」

「・・・」

何も考えていないと言ったら、葎那は怒るだろうか。

葎那救出という言葉しか頭に無かった刹那に事後処理の事を言われても口を開けるわけが無かった。

ジト目で見られても困る。

「じゃあ、ニルが何とかしめるでしょ」

「しつぽが？」

どうやら、“しつぽ”で名前が固定されてしまったらしいニルギリを葎那は心底嫌そうに見る。

その強い視線にニルギリはたじろぐが、刹那にとってしてみればこの位の視線はまだ甘いほうだ。

基本的に他人と言う存在が嫌いな・・・と言うよりは無関心な葎那にとって、視界に入っているだけでも奇跡的だ。

刹那、それ以外は他人。その二つしか区切りが無い葎那がこうも話

すのは本来ならば珍しい事である。

「ニルにお任せでし！」

ドーンと胸を張るが、如何せん頼りない。

そんな二人の視線に気付きもせず、行動に移すニルギリ。

何をするかと思いきや、キヨロキヨロと辺りを見渡すと手ごろな石を拾ってくる。

「おい、その石で何する気だ？」

「まあ、見てくださーい刹那しゃま。」

ニルギリは石を片手にしゃがみ込むと、落書きをするかのように地面に線を描いた。

それは何か模様や文字を描くのではなく、グルッと塔の周りを一周。塔を囲むように円を描く。

「巻き込まれないように、しゃがんでいてくださーいね・・・」

「・・・？」

ニルギリの行動に頭にハテナを浮かべながらも、言われた通りに下がる刹那と刹那。

きつと、何か予想外の事をしでかすに決まってる。

たった少しの経験を経て、二人は同じことを思った。

そして、ニルギリは大きく息を吸い込む。

）　　）　　）

夜羽に伝わる歌だろうか、メロディになっているのは分ったが何を言っているかまでは悪魔の二人には分らなかった。

力強いわけでは無い、繊細な音でも無い・・・

か細いそれはどこか消え入りそうで、歌と言うよりも詩を詠んでいる様にも聞こえた。

その声に呼応して円の中の地面だけが揺れる。

海の波のように緩やかに、しかし一定に波紋を広げた。

そして地の色が土の色から黒く変わる。

先ほどよりも揺らぎは少なく、何だろうと二人は目を凝らした。

穴か？　そう理解するよりも先に、塔はそのまま何の音も立てずその黒い円に沈み飲み込まれた。

と言う表現が正しいのだろう。それはもう勢いよく落下した。

塔を飲み込んだそれは、跡形も無かったかのように傷跡一つ残さず地の色に帰る。

一瞬、ほんの一瞬の出来事

その瞬間を見ていたからこそ、落とし穴に落ちたようだと表現出来るものの

ただ、跡形も無く消えたようにしか見えなかった。

二人はその場を見、お互い顔を見合わせ、また跡地を見・・・

「はあああああああああ！？」

双子の叫び声だけが何も無い地に響いた。

++*+*+*

魔界城内、見晴らしの良い杏那の自室。

杏那は専用の椅子に座り、書類に目を通す仕事をしていた。

（全く、何だつてアタシがこんな仕事してるんだか・・・）

母親に修行だと言われているものだが、嫌な仕事を押し付けられているようにしか見えない。

一体何の修行だと、彼女に問いただしたのなら「花嫁修業だ」と訳の分らない事を言い出すに違いない。

母親は早く嫁に行つて欲しいらしいのだが、杏那自身嫁に行く気など、さらさら無かった。

「はいはい。そんな嫌そうな顔しないでくださいよ。マスター。

一旦休憩にしましょう」

そう言う執事の言い分ももつともだろう、杏那は知らず知らずに眉を寄せていた。

ニコニコ、否ニヤニヤと笑う執事に溜息が出た。

内心面白がつているのだろう、杏那が悪戦苦闘している様が。

言葉が素直な分、表情が素直では無かった。

器用なのか不器用なのか分らない人である。

執事の手を持ったダージリンがふわりと香る。

「ダージリンか・・・」

「好きでしょう？貴女はこの紅茶が一番。」

「ああ・・・、ありがとう。」

自分の周りは穏やかだ、と杏那は感じる。

こうやって、こういう些細な時間が続けば楽なのにとも思う。

しかし、葎那の事、先ほど見た刹那と居た子供の事・・・

どうにもこの先厄介事が多そうな予感がした。

椅子を回転させ後ろを振り向くと、見えるのはいつもの景色。

きつとあの視線の先の塔では律那が苦しみ、刹那は救おうと必死になっっているのだろう。

瞳を閉じてゆっくり息を吐く。

そして、再度瞳を開けたとき・・・

（可笑しい・・・疲れてるのかアタシは・・・）

画面を裂くかの様にその存在を主張する塔が見えないという事実から、椅子を戻し視界から追い出すことで目を逸らした。

Chapter 4 Day of outside

23 脳内オーバー（後

脳内オーバーヒートとその先に
明るい未来が待っている・・・はず

助けて

見つけて

忘れないで

存在を認めて

・・・名を呼んで

長い長い年月を経て、思いが変わる意思が変わる。
願いがまた変わる

ポカンと開いた口が塞がらない双子

そして、良い仕事したと言わんばかりに胸を張るニルギリ
その二つが対極過ぎて見ている者がいたら滑稽に映ったことだろう。

刹那の手から荷物が落ちた。

「おい！塔はどうなったんだっ！！」

フリーズから抜け出した刹那はニルギリに近づき指を指す

「うひゃっ、二つ、ニルの世界に持ってたでし・・・」

「は？ニルの世界？」

自身ですら分かっている事だが、さほど刹那の頭の回転は速くない。

抽象的に言われたって分るはずがなかった。
やれやれと葎那は予想外のニルギリの行動に溜息をついた。

「しつぽの世界・・・ようは、別次元にそのままそっくり塔を移動させたって事でしょ。」

空間移動の魔術の一種だよ。・・・しかもかなり高度の・・・」
葎那はてつきり、塔を攻撃により破壊するのではないかと薄っすら予想していた。

なんたって精霊最強種だ。攻撃力はピカイチだろう。

しかし、その予想の斜め上に行く行動には溜息しか出てこなかった。

「そうでし！駄目だったら持って帰って来ましゅけど・・・」

「いや、いい。問題無いよ。」

葎那はあつさりと否定した。

塔をただ破壊したなら物音も残骸も残る。

しかし、この方法でなら何一つ痕跡が残っていないのだ。

この塔をわざわざ視界に入れようだなんて悪魔は余程の物好き以外さほど居ない。

ならば、騒ぎになるのも必然的に後伸ばしになるだろう。

それに越した事はない。

「葎がそう言うなら、問題無いんだろうけど・・・」

「うん。大丈夫」

「そうでしか・・・！良かったでし。」

あからさまな態度でホツとするニルギリ。

ニルギリが選択した方が最善の判断だったと言つのはあえて口に出さない。

調子に乗るだけだ。

「塔から離れた・・・否、塔が存在しなくなったから大分楽だよ。なんたつて原因が消えたからね。今の問題は寝込んでて体力が落ちてるくらいだね。」

「・・・っ！そうか！じゃあ・・・」

「助かった・・・よ。ありがとう、せつちゃん・・・・・・・・・・
・としつぽ。」

その言葉に刹那は崩れ落ちた。

今まで張り詰めていた糸が切れたようだ。

不安だった物が軽くなった。諦めないで本当に良かった。守れた、守る事が出来たのだ。大切な片割れの存在を。

「・・・泣かないでよ、せつちゃん。ほんと泣き虫なんだから。」

律那の手が刹那の頭を撫ぜる。

その手つきがたまらなく優しく、刹那はもっと泣きたくなった。

「ばかつ・・・泣いてなん・・・

「ぴええええええ！刹那しゃま、泣かな・・・でっ、うっ！」

お前が泣くなよ。」

ニルギリが刹那に飛び付いて泣く。

そんな使い魔の姿があまりに幼く滑稽で笑いが零れた。

凄い事をしていると言うのに、それを全く感じさせない。

やはり大物を召喚したと刹那も律那も思った。

しかし、律那にとってはやはり面白い事では無かったのでニルギリを刹那から無理矢理引き離れた。

パッと出の奴が、二人の絆の中に入ってくるのは良い気分がしなかった。

「ありがとな、ニル。流石俺様の使い魔！」

「はいでし！」

「まっ、せつちゃんの使用魔なんだからこれ位は出来て当然だよな。」

久しぶりに漂う穏やかな空気に、心の底から笑えた気がした。

今まででは想像出来ないくらいの楽しそうな笑い声が何も無い地に響いた。

Chapter 4 Day of outside

24・自由を求めて（後

Day of outside

人はいつも自由を求めて、人はいつも自由にならない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6333m/>

Story.01 黒のプレリユード

2010年11月14日02時50分発行